

一般社団法人近畿建設協会支援

人がつながるしくみをつくろう！
コミュニティデザイン講座 in 水源地の村

コミュニティデザイナー山崎亮氏講演会ほか報告書

「ウチ」と「ソト」から、かんがえる
あしたの「水源地の村づくり」

平成25年10月



公益財団法人 吉野川紀の川源流物語

人がつながるしくみをつくろう！ コミュニティデザイン講座 in 水源地の村

心がまえ講座「人と人のつながりで、できること」 P4

2013年6月7日(金) 16:00～18:00

川上村役場2階 会議室 (参加者60名)

コミュニティデザイナー山崎亮氏による、地元の住民、役場職員を中心とした講座を開催。コミュニティデザインの意味や目指すべきものについて、ひとつの事例の経過を通して参考になるお話をいただきました。

現地(知)講座「この村で、できること」 P31

2013年9月8日(日) 10:00～15:00

森と水の源流館出発の村内ミニバスツアー(参加者30名)

村外からの参加者も募り、村内の樽丸工場や人工美林、廃校となった学校校舎での取り組みを見学。ツアーの企画・コーディネートは地域おこし協力隊が担当しました。

交流講座「それぞれに、できること」 P36

2013年10月26日(土) 13:30～15:30

川上総合センターやまぶきホール(参加者150人)

再び山崎亮氏を招き、地域おこし協力隊からの取り組み報告を通じた質問や村内外でのいくつかの活動者による相談に対して、事例紹介や具体的なアドバイスいただく形式で進行了ました。

主催 森と水の源流館(公益財団法人吉野川紀の川源流物語)

支援 一般社団法人近畿建設協会

後援 国土交通省近畿地方整備局紀の川ダム統合管理事務所、奈良県、
近畿環境パートナーシップオフィス(きんき環境館)、一般財団法人奈良県ビズターズビューロー
吉野川・紀の川流域協議会、奈良県川上村、川上村教育委員会、川上村立図書館

協力 NPO法人 奈良21世紀フォーラム

この講演録は、後日音声記録から聴きお越したもののため、講師等に文責はありません。
各ページ内の写真は、講演内容と関連したものではありません。

はじめに

ことし山崎亮さんに川上村にお越しいただくことができました。地域づくりにたずさわれる方々なら、一度は名前を聞いたことがある。本を読んだことがある。そうでなくても、テレビで見たことがある・・・その山崎亮さんです。そして川上村の中でも多くの声があった「一度会って見たかった」山崎亮さんです。

川上村では、半世紀を超える長い時間をかけた大滝ダム建設事業が昨年度末に竣工を迎え、大きな節目となりました。紆余曲折のあったダムの完成を迎えるまでは、いわば行政主導の村づくりが、この村の特徴であったことは否めません。しかし今、本格的なダム後の村づくりに取り組み、村にはいくつかの新しい動きが見え始めています。目標に向かって人が集まり、語り合いも始まりました。ただ大小いろいろな壁にもぶつかっていく時期です。そんな時に「山崎亮さんに出会ってみたい、話を聞いてみたい」と思われたのではないのでしょうか。

今回の講座では、“ウチのひと”と“ソトのひと”、地域づくりを考える多様な人々が出会い、明日につながる幾重かの輪をつくりたいと考えて実施しました。

講師 / コミュニティデザイナー 山崎 亮 氏

studio-L 代表。京都造形芸術大学教授。慶応義塾大学特別招聘教授。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。まちづくりのワークショップ、住民参加型の総合計画づくり、建築やランドスケープのデザイン、市民参加型のパークマネジメントなどに関するプロジェクトが多い。「海士町総合振興計画」「マルヤガーデンズ」「studio-L 伊賀事務所」でグッドデザイン賞、「親子健康手帳」でキッズデザイン賞、『コミュニティデザイン（学芸出版社）』にて不動産協会賞などを受賞。主な著書に『コミュニティデザイン』（学芸出版社：不動産協会賞受賞）、『ソーシャルデザイン・アトラス』（鹿島出版会）、『コミュニティデザインの時代』（中公新書）などがある。



心がまえ講座「人と人のつながりで、できること」

2013年6月7日（金）16:00～18:00 川上村役場2階 会議室

事務局（この回のねらい）

今日はあえて手狭ですが身近な役場の会議室という場所を選んで企画させていただきました。そして村民と関係者だけで山崎さんから学ぶ貴重な時間とさせていただきました。今日のこの時間が明日からもずっとつながっていく第一歩になればと願っております。

10月に再び山崎さんにお越しいただく時には、私たちももう少し勉強し、本日来てくれる地域おこし協力隊のみなさんにも川上村のことを色々知ってもらい参加をしておうと考えています。そのようないろいろな村の動きも紹介しながら、山崎さんと意見交換ができるような場にしていきたいと思っております。

ですから、今日のところは山崎さんが各地でされてきたいろいろなお仕事、山崎スタイルの住民参加型と言われる場所づくり、仕組みづくり、そして地域づくりというものを一緒に勉強させていただき、みなさんと共有することを目的とします。では山崎さんよろしくお祈りいたします。



山崎

コミュニティデザインってどんな仕事？

山崎です。ありがとうございます。よろしくお願いします。地域おこし協力隊の方もいらっしゃるんですね。手を挙げてもらってもいいでしょうか。結構いらっしゃいますね。

いろんなところに呼んでいただけるんですが、最近自分の地元というか、故郷だった場所からも呼んでもらいました。僕は転勤族の親を持っていましたので、いくつかの場所を回るようになったんです。生まれたのは東海市だったので、それを東海市さんがどこかで調べて講演を依頼してくれました。愛知県の長久手市にも中学校ぐらいまでいたんですが、その時の中学の同級生から講演を依頼されました。故郷で講演する場合は少し恥ずかしい感じがします。川上村は僕の故郷ではないのですが、話すのが若干恥ずかしい感じがします。今回の企画をされている森と水の源流館の尾上さんが、もともと僕が勤めていた会社の上司だったからです。だからどんな偉そうなことを言っても「あー、あの山崎がね」という感じで見られるだろうという感じがしますから、そういう意味で故郷で話すような恥ずかしさを今日は持っています。

赤ちゃん連れの方もいらっしゃいますね。ありがとうございます。大きい声で話しているので、泣き声も大丈夫ですよ。僕のような坊主にヒゲづらは赤ちゃんには人気がないようで、近づくと泣かれるんです。でもおばあちゃんには人気があります。

僕の仕事はコミュニティデザインと呼んでいます。コミュニティの方々と一緒にその町の将来を考えていくということです。これはもうみなさんご存知のことだと思いますが、コミュニティは一言で言って2種類あると思います。地域の縁でつながっているコミュニティ、自治会などはこういうコミュニティです。もう一つは「こんなことが好きだ」というテーマで結びついているコミュニティです。「鉄道が好きだ」、「釣りが好きだ」というような人の集まりはテーマ型コミュニティ、あるいは興味型コミュニティと言われるかもしれません。僕たちは普段フェイスブック、ミクシィ、NPO、サークル、クラブでつながっているようなテーマ型と地縁型とをどういうふうにミックスさせて町を元気にしていくかというようなことを考えています。今年度は4月から83地域ぐらい依頼をいただいてサポートさせてもらっています。うちがやっている仕事を全てお話するとなると明日の朝まで時間がかかってしまいますので、人口規模がなんとなく似ていると思うところ一つの事例についてじっくり話す方がいいと思いました。



今日は島根県の隠岐郡海士町の話だけをしようと思います。

海士町は人口 2,300 人ぐらいの離島です。IターンとUターンとネイティブの人、3種類の人が住んでいます。外から入ってきた人、1度出て戻ってきた人、ずっと地元で育った人、この3種類の方々が住んでいるというところですよ。

海士町は合併してもよさそうな地形ですが、合併はしませんでした。隠岐の島町や知夫島など色々ありますが、合併はせずに単独町政でいこうということになりました。借金も 103 億円ありましたがなんとかしようということになりました。海士町はN T Tに勤めていた名物の町長が色々なアイデアを出してIターンが年間に 70~80 人来るような島になりました。商品開発研修生や集落支援員や地域おこし協力隊などの人たちも入ってきて、新しい事業を起こす「ここで起業してくれ」というような政策をどんどんやっていきました。だからIターンの人が結構多かったんです。

僕たちがここに入ったのは町長がそういう面白いことをやり始めて3~4年経ってからです。海士町は今有名になっているので「海士町を有名にしたのはスタジオ・エル、山崎さんですね?」とよく言われますが違うんです。元々町長がそういう面白いことをやっていたんです。そういう前提があって、その途中から僕たちは呼ばれたんです。呼ばれた時に町長に「何か問題になっていることはないですか?」と聞いたら、「確かにIターンはたくさん来てくれた。2,300人のうち300人ぐらいがIターンです。Uターンもわりと戻ってきてくれるようになってきた、地元の人もいてくれている。ただそれぞれが若干仲が悪いというのが課題だ」と言われました。

川上村に入ってきているIターンの人もそうかもしれません。東京や大阪や名古屋からの人です。川上村はまだ地続きですが、海士町のような島に行くとなれば東京あたりではまず「東京や横浜にずっと住んでいたのに島なんかに行って大丈夫?」と周りから心配されます。「島なんかに行ったら生活が色々で大変かも」と言われても「大丈夫」と言って島に飛び込んで来ている人たちなわけですよ。

その人たちが最初にアドバイスを受けるのは、「島、村に行ったら最初にまずみなにしっかり挨拶をしなさい」ということです。だから海士町に来るIターンの人たちは皆さん元気ハツラツの挨拶なんです。誰に会っても「おはようございます!」とすぐに挨拶するんです。でも島の漁師さんは基本的に恥ずかしがり屋です。「おはようございます!」と言って「やあ、おはよう」という漁師さんはまずいないです。みな恥ずかしそうにそっと顔をそむける。それが普通なのですが、Iターンの人たちは挨拶をすることが正しいと思っているのでいつも元気いっぱい挨拶をするわけなんです。その度に若干無視される。そうすると段々心が折れていきます。Iターンの方は外から入ってきて「こんなに挨拶しているのに受け入れられていないかもしれない」となって、段々挨拶の言葉が出てこなくなり、挨拶ができなくなってきてしまいます。そうなってくると島の方は「あいつらは挨拶もできない。けしからん」ということになってしまいうんです。Iターンの人と地元でずっと住んで

いる人との間はなかなか難しいです。Iターンの人は地元の人と一緒に何か面白いことをしたいと思っていても地元の人に受け入れられていない気がするし、地元の人たちはIターンの人が気に入りません。例えば境港からのフェリーの時間は3時間半ありますが、Iターンの人はその時間がもったいないのでノートパソコンを開けてメールチェックをしたりします。そのノートパソコンを開く状態が地元の人には気に入らないんです。「気取りやがって」という感じです。ノートパソコンやアイパッドを使い始めたりすると「チッ」と舌打ちがあります。それでまたIターンの人はへこんだりするわけです。

Uターンの人はその間にいます。元々中学ぐらいまで地元の人と同級で、高校や大学で外に出た人たちが戻ってきたというタイプですから、「戻ってきた」ということを地元の人には言いたいんです。でも地元の人からは「お前1度出たよな」というふうに見られている人たちです。だからこのへんの気持ちも微妙な感じです。Uターンの人たちは東京や大阪に出て島の良さを実感して戻ってきているわけですから、Iターンの人たちと意見が合うわけです。でもIターンの人たちと仲良くしすぎると地元の人たちとの距離ができてしまうのでどっちつかずという状況になっています。これが海士町のIターンとUターンと地元の人たちの関係でした。だから最初から言われたのが「三者の関係をうまく混ぜてくれないか」ということでした。それが今のところの課題ということでしたので、1番初めにワークショップをやりました。

Iターン組、Uターン組、ずっと地元で生まれて暮らす人 みんないっしょにワークショップをやりました。

これはひょっとしたら川上村の方たちも何度もやっているかもしれませんが。ワークショップとは、みなで話し合いをする場所です。こういう模造紙に付箋でいっぱい意見を出していきます。「なるべくたくさん意見を出して下さい。質より量です。誰が何を言ったかは問題ないです。どんどん好きな意見を書いてください。筆跡調査はしませんから」と言いながらいっぱい意見を出してもらいます。

2,300人のうち100人ぐらいの人が会場に集まってくれました。その人たちに「誰が何を言ったかは問題ないです。筆跡調査はしませんから」と一応言っておきましたが、裏では「誰が何を言ったのかこそ知りたい」と思っていました。だから全部ビデオに記録しておきました。写真も全て撮って、どの人がどんなことに興味のある人なのか、後でビデオを全部見て解析しました。「鈴木さんは子育てに興味があるな」とか「田中さんは環境のことしか言っていないので絶対に環境派だ」とか、誰がどんな意見の人なのかということの後で事務所で解析していきました。なぜそうしたのかと言うと、先ほど言いましたIターンとUターンと地元の人たちが仲良くなるようなチームを作るために、誰がどのチームに入るのかを予測しておきたかったからなんです。100人を4つのテーブルに分けようと思った

のですが、そのテーブルの名前を何にすればどの人が入るのかを考えました。「人」「暮らし」「産業」「環境」という4つのチームを作ったのですが、例えば「暮らし」の中に「人」も入っているのではないかとつっこまれそうな、かなりゆるい言葉です。でもこの言葉でないといい感じでそこに人が入らないのではないかと思ったんです。

例えば「教育チーム」で作るとしたら田中さんは絶対に入る。でも「教育チーム」で他に誰が入るだろうとシミュレーションしてみたら若い女性ばかりになってしまいました。それはまずいということで「教育」というのはやめました。「じゃあ「人」というふうに開いてみたらどうだろう？「人チーム」だったら誰が入る？」ということで、またうちの事務所でシミュレーションしてみました。そうしたらちょうどいい案配になりました。そういうふうに、ちょうどいい案配になるような言葉をこちらで先に選びました。

「人」「暮らし」「産業」「環境」という4つのチームを作って、14歳から75歳までの参加者の年齢構成と男女比が大体同じぐらいになるようにして、Iターン、Uターン、地元継続居住者、この3種類の人が同じぐらいの割合でそれぞれのチームに自然と入るようにし、最終的に20~25人ずつぐらいのチームに分かれるようになる組み合わせにしないといけないと思っていました。うちのスタッフで「この人はこのテーブルに行くだろう」とシミュレーションし、何度もテーブルの名前を変えて、最後にこの4つの言葉ができ上がりました。

2週間後の2回目のワークショップに持って行って皆に見せたものがこれです。4つテーブルを作って、100人の人に回りに立ってもらって、「前回皆さんに出してもらった意見をパパッとまとめて適当に4つ名前をつけてみました」と言いました。本当は適当ではないんです。2週間ずっとシミュレーションしていたんですが、「適当に分けてみました。自分の興味のあるテーブルについてください」と言ってテーブルについてもらいました。大事なのは自分の意志でそのテーブルについたということなんです。僕たちが思っているテーブルにそれぞれ思っていた人が入るかをずっと見ています。蓋を開けてみると各テーブルとも「大体同じ人数で、年齢も同じぐらいのばらつきで、IターンもUターンも入っていますね」という感じになります。皆が気づかないうちに、「自分が行きたいと思うテーブルについたらたまたま同じような構成になっていた」というふうになりました。こちらで「このテーブルについてください」というふうに分けてしまうと「私はそっちじゃないのに」ということになってしまうので、自分の意志でそのテーブルについたということが大事だと思っています。

それから8回ぐらいワークショップをしました。公式には8回なんですが、その間に皆さん40回以上集まっていました。誰かの家に集まったり、チームごとに集まったりして「この町をどういうふうにしていくか考えよう」ということをしていました。

要望・陳情型ではなく、提案型の意見をお願いしました。

これは総合計画と言われる町の今後 10 年間の計画を作ることが目的だったので、「10 年間町は何をするのか、自分たちは何をするのか」という両方を話し合ってもらいました。この時 100 人の住民の人たちをお願いしていたのは、要望・陳情型の意見ではなく、「私はこういうことをやりたい。ここだけを行政に手伝ってもらいたい」というような提案型の意見をお願いしました。「行政にあれをやってくれ、これもやってくれというような話しはこの総合計画には載らない」ということはお話しておきました。皆さん 8 回、実際には 40 回以上集まってしてくれました。家に集まったりご飯を食べたりしながらワークショップをしていました。

僕たちが現場にいない場合もあります。住民の人たちが自分たちで写真を撮って自分たちでワークショップを進めてその写真と議事録を大阪の僕たちに送ってくれました。僕たちもなるべく現地に行く回数は減らそうと思っています。業務をたくさん受けると僕たちは税金をたくさん使わなくてはいけなくなるんです。僕たちは業務の項目をなるべく減らすようにするんです。なるべくサボろうとするんですね。僕たちが行くと「それならやってくれ」と頼られてしまうので、住民の人たちができることは住民の人たちでやっています。「議事録ぐらい書けますよね」、「ちゃんと写真を撮っておいてくださいよ」という感じです。写真もフラッシュをたく場合とたいはいけない場合などをわかってもらうように写真講座なども行いました。

住民の人たちが自分たちで企画をしたり活動を開始したりするようにしました。総合計画という計画書は最後 1 冊の本にまとめなくてはいけないわけですが、その 1 冊の本にまとめる時のタイトルを何にするかというので 4 つのチームが結構もめました。4 つのチームがそれぞれ「自分たちが大切にしたい言葉」というものを用意したので、「うちのチームが大切にしている言葉をタイトルに入れてほしい」とそれぞれのチームが思いました。でも全部のチームの言葉を入れるとタイトルがやたらと長くなってしまいうんです。「これはまずい、シンプルな言葉にしたいね」ということで、どういうタイトルにするのがいいのか皆で話し合うために合宿をしました。海士町で 2 泊 3 日で泊まり込みで、ずっと話し合いをしてもらいました。中学生は夜 9 時就寝でしたが、大人は結局寝ていなかったと思います。3 日目の朝なんかは皆さん寝てなくてへロへロでした。コミュニティデザイナーという職種がこういう時に何をやるべきかというのは単純なことです。しっかり睡眠をとることです。3 日目の朝にハツラツな気持ちで「おはようございます！どうですか皆さん！決まりましたか？」という感じで入っていくことです。そうすると皆さん「もうダメ。頭が回っていない」という感じです。そこで「いい言葉が出ているじゃないですか！島、幸福、笑顔、もうこの辺でいいんじゃないですか？例えば『島の幸福論』、これくらいシンプルにした方がいいんじゃないですか？」と僕が言って、その時に全会一致で決まった『島の幸福論』というのが総合計画のタイトルになりました。

「我々がやります」と言った住民の 24 の提案を別冊にしました。

100 人で作ったものですから残りの町民の人にも知ってもらわなくてはいけないということで、300 人ぐらい、議員の方々にも集まってもらって自分たちがどういう計画を作ったのか報告会というものをしました。一応これは総合計画ですので、策定委員会というものを作って議会にあげて承認をしてもらって総合計画が完成ということになります。ただ人口 2,300 人で住民が 100 人も参加しているということは議員の人も大体知っていますので議会ではほとんど文句はなかったです。議員も町民が作っているということを知っていますので、指摘は唯一「町長はこの方針に従ってしっかり業務をすること」ということだけでした。他は全会一致で「そのままやってくれ」ということになりました。ものすごく感動的でした。

総合計画書というのはどこの自治体にもあるものなんです。もともと地方自治法の中で作りなさいと言われていたのですが、10 年ぐらい前から絶対に作らないといけないわけではないと言われるようになったんです。でもやっぱり計画はあった方がいいし、せっかく作る機会があるのだったらそれをうまく利用しようということで、今でも 1,700 の自治体で作っています。ところが作って 10 年間、皆がしっかり読んでいるかということとそうでもないんです。ですから海士町では本編は極力薄くさせてもらいました。大体どこの総合計画でも厚さは 1cm ぐらいあるし、「人に優しい町づくり」や「水と緑の町づくり」というようなタイトルが書いてあって、おおよそ読み進めたいと思わない感じのものが多いんです。それだったら極力薄くしてどうしても書かなければいけないことだけ書こうということで 3mm ぐらいのペラペラの厚さにしました。それで印刷費も浮いたので頼まれもしないのに別冊を勝手に作らせてもらいました。

住民が提案した 24 の施策、「我々がやります」と言った 24 種類を『島の幸福論』という別冊にまとめました。簡単に紹介します。

どういことが島の幸福論か最初の 3 ページ目ぐらいにまとめました。海士町の幸福論というのは東京や大阪の幸福論とは違うのではないかというのが最初の前提です。これは海士町の町民と一緒に話し合っで決めたものです。

「教育・学力」のテーマでは、海士町の人たちから見て東京や大阪の人たちはなぜそんなに学歴が高いのか？というのがまず不思議な点です。「すごく大卒が多いが、どうしてそんなに大学を卒業したいのかわからない」、「大学院を卒業している人たちもいるが、何を考えているのかわからない」というのが海士町の人たちの発想です。それで海士町の人たちは考えました。「いい大学を出て、いい会社に入って、給料をたくさんもらいたいと思っているのでは？」と思って所得を見てみると所得の指標も高いです。それで「なるほど。たくさんの給料をもらいたいと思っていい大学に行くのはわかる。でもそれならどうしてそんなにお金がかかるのか？」というのが次の質問です。「東京でもちょっとでも広い家、ちょっとでも自然のあるところ、ちょっとでも安全なコミュニティに住みたいのでは？」

ということで理解します。「でも東京の人は広い家に住めているのか？」ということになると「暮らしチーム」が出した生活環境指標では「家は狭いらしい」。「東京の人たちは自然が豊かなのか？」というところでは「いやいや、自然はないらしい」。「東京は安全なのか？」、「いやいや、物騒らしい」「それじゃあダメじゃないか」というのが海士町の人たちから見た東京や大阪のイメージのポイントです。つまり東京や大阪の人たちは一生懸命勉強して給料をたくさんもらっているが、目的として手に入れようと思っているものが手に入っていないと。海士町はどうか。その目的になっている部分がもうすでに手に入っているんですね。広い家 - あります。広い一軒家を借りても1ヶ月の家賃は5,000円ぐらいです。自然環境 - あります。自然は腐るほどあります。もう一部腐ってます。里山も海も手入れできていない状態です。安全・安心 - めちゃくちゃ安全・安心です。2,000人なので皆顔見知りです。Iターンで来た人が最初に間違えるのは車の止め方です。海士町では車を止めた時、基本的にキーは抜いてはダメなんです。「何かあった時に誰が運転するのか」と怒られます。つい都会にいる時の癖で扉は開けておいてもキーは抜いてしまいます。キーがないと動かしたい時に誰も乗れないと文句を言われるのでキーは抜いてはダメです。誰も車なんか盗みません。仮に盗んだとしても次のフェリーが来るまでは絶対に島の中にいなくてはいけないので車を盗む人なんていないんです。めちゃくちゃ安全・安心です。

「安全・安心で、自然もあって、生活環境も広いのだから、目的にしている部分はすでに手に入れている、だから月給が低いとか学歴がどうか言う必要もなく、僕たちがのびのびと使えるこの環境を使ってリッチに暮らせばいい」というのが島の幸福論です。



別に海士町にスターバックスが欲しいわけではないということです。「東京に行って、スターバックスに行って、いい匂いのコーヒーを買って、優雅にテーブルについて、ソファを下げたら後ろの人に当たって「すみません」と言っているのでは全然リッチではない。僕たちはスターバックスではないリッチな空間をいくらでも使って、楽しく生きていってしまえばいい」みたいなことをまずは皆で話し合いました。

本編は「人チーム」、「産業チーム」、「暮らしチーム」、「環境チーム」がそれぞれ出してきた理念と政策で施策の大綱が組まれていきます。住民主体で書いてあるので役場から見て、役場の何課がどれを応援したらいいのかがわからないので、別のページには、何課がどれを応援するのか組み替えてあります。住民が先に施策の大綱を作って、これを行政はどうサポートするのかという構図になっているのです。

別冊の方は、かなり単純です。目次は「1人でできること」「10人でできること」「100人でできること」「1,000人でできること」という目次になっています。住民の人たちに「我々がこんな町づくりの活動をします」と言ってもらった24の提案を皆に聞いて目次を作りました。「1番目の提案の「海士人宿」は何人ぐらいでできそうですか?」、「それなら10人ぐらいでできるのでは」、「それなら10人のところに入れましょう」、「2番目の提案は?」、「1人でできるでしょう」、「それなら1人のところに入れましょう。今日からやってください」、「3番目の提案は?」、「これは1,000人いないと無理ですね」、「では1,000人のところに入れましょう」というふうにして目次を作りました。

「1人でできることは今日から1人でやってください。10人でできることは10人寄ってやってください。ただ100人、1,000人寄らないとできないことだけは行政と一緒にやってください」というようなことにして、目次だてにしたわけです。

別冊は絵本みたいな感じです。文字はなるべく減らして、字はなるべく大きくして、イラストを入れて、すごく分かりやすい内容です。

そして、4つそれぞれのチームが、活動をスタートさせました。

「提案するだけではダメですよ、実行してください」というのは約束でしたので、「産業チーム」は「炭焼き倶楽部鎮竹林」を始めました。海士町でも孟宗竹の竹林が広がっていますのでそれを切って炭を焼く活動をしています。最近は炭焼き釜でピザや天然酵母のパンも焼き始めています。

「暮らしチーム」は「お誘い屋さん」というのを始めました。独居老人や1人暮らしの人の家を訪ねては「クリスマス会をしますよ」、「花見をしますよ」、「餅つきをしますよ」と誘いに行くんです。先程も言いましたが島の漁師さんは高齢になると本当に外に出てこなくなります。恥ずかしがり屋なので自分から出てくることもありません。だからこの若い奥さんたちが家まで誘いに行くんです。「今日は餅つきをしますよー」と言いながら日がな

回ります。

「環境チーム」は水を調査し始めました。川上村はかなりたくさん水があるところですが、海士町は島なので回りはみんな塩水です。その中で淡水が湧いている場所があります。その湧水の水質や何年くらい飲める水なのかを大学と協力して調査したら結構いい水だということがわかってきて、平成の名水 100 選というのに選ばれました。海士町の「天川の水」です。名水 100 選に選ばれると名水サミットというサミットを持ち回りでもどこの自治体がしなくてははいけないらしいです。2008 年か 2009 年に「来年は海士町でサミットをしてください」という電話が役場にかかってきました。役場としては嬉しい半面また仕事が増えたなという感じでした。サミットには全国から 300 人くらい名水ファンが来るんです。「イベント会社に頼んで名水サミットをしてもらわないといけなかな。でも予算が…」という感じだったのですが、水を調査していた「環境チーム」に言えば喜ぶかなということで「環境チーム」の 20 人に来年名水サミットが来ることを伝えました。そうすると「環境チーム」はすごく喜んで、自分たちが全て仕切ると言い出して、結局「環境チーム」が全部仕切ることになりました。「環境チーム」は名水サミットのパネリストとして早稲田大学の水の専門家やサントリーの水の研究所の所長など、偉い感じの人にダイレクトに連絡して、「もしもし、海士町の町民ですが、あなたに来てほしいんです」と直談判しました。「こんなふうに依頼されたのは初めてだ」と言って、皆さん結構来てくれるようになりました。僕も行きがかり上、パネルディスカッションの司会進行役を頼まれたので喜んで行きました。

「人チーム」は「海士人宿」というのを始めました。昔、海士町では血気盛んな若い衆が空家に乗り込んで、そこでお酒を飲んで海士町の今後や自分たちの今後を喧々諤々議論していたんです。そのことを誰が呼ぶでもなく「海士人宿」と呼んでいました。現在、海士町はどんどん人口が増えているので空家がないんです。去年と比べても 10 何人増えました。若い 1 ターンがどんどん入ってくるので今は空家がないんです。だから「海士人宿」をする場所がなく、ここ 10 年「海士人宿」はやってなかったんです。でもやっぱり「海士人宿」はよかったということになり、「人チーム」が「海士人宿」をやりたいと言い始めました。それで空いている保育園を自分たちの力で改修して「平成の海士人塾」をしようということになりました。



これらは、れっきとした総合計画に基づく事業です。

だから集落全部が応援しようと言ってくれています。

風船のオバケみたいなイラストはしゃもじです。海士町はしゃもじを両手に持ってカンカンと叩いて踊る「キンチャモニャ踊り」という踊りが有名です。普段からしゃもじは使っているだろうし、どんな季節も手に馴染んでいるものだと思います、イラスト化しました。このイラストは全部顔が違うんです。全部提案してくれた人たちの顔に似せて書いたんです。住民の人たちがイラストを見れば大体誰かわかります。誰が言い出したかがわかるので、ちゃんとやっていないと皆に言われます。ゆるやかに背中を押している感じです。顔写真までいくと島ではやり過ぎです。その微妙な加減でイラストぐらいがいいかなという感じです。

ここに描いている人は、46歳、元ヤンキーです。この人はノッてこないです。でもこういう人が大事なんです。ヒアリングに行ったら「はっきりしておく。俺はお前たちみたいなのが1番嫌いなんだ」と言われました。「素晴らしい、あなたみたいな人が来ないとワークショップはおもしろくなりません」と言って紐で縛り上げて引っ張るように連れてきました。このような人が来てくれると、ヤンキーの子分みたいな人がついてきてくれるんです。だからいいんです。

「町づくりワークショップ」って1回目を公募すると町づくりが大好きそうなおじさんなどが前の方に座っています。質問がないか聞くと、そのおじさんが「ちょっとよろしいですか。そもそも町づくりとは...」という感じで演説が始まってしまいます。そういう時にこの方が「うるさいぞ！」と言ってくれたら非常にいい雰囲気になります。それはそうですよ、楽しいことをやりにきているんであって、「町づくりとは」なんて聞きたくないですから。そういうことに対して一喝してもらおうと一発で締まるのでとってもいいです。

こちらの方も町づくりには絶対に来ないタイプです。この人はヴィトンのバッグ以外には何も興味がないタイプの人です。「私は行政のやることを1番信じていない」と言ったので、「素晴らしい、あなたは来ないとダメです」と言って縛りつけるようにしてワークショップに連れてきました。こういう人たちが結果的にはチームのキーマン、キーウーマンになっていることが多いです。

それで「海士人宿」が開始しました。皆で話し合いも慣れたものです。保育園跡地を自分たちで改装して、どこをどんな部屋にするのかということをしました。

中を改装するのに少しだけ手伝いましたが、ほとんど自分たちで改装を行いました。材料だけ行政が供給しましたが、他は島の大工の人や工務店の人を呼んできて協力してもらって自分たちで作ってしまいました。それで「海士人宿」というのをやりました。

月に1回イタリアンレストランをしています。イタリアで料理の修行していた海士町出身の人がいます。イタリアのシチリア島で3年修行して、東京のイタリアンレストランで5年修行して、海士町に戻ってきたんです。海士町で地産地消型のイタリアンレストラン

をやりたいと思っているんですが、急にお店を開いても受け入れてもらえるかわからないので、とりあえず「海士人宿」で月に1回イタリアンレストランを開いて様子を見ると言っていてやってくれています。

46歳、元ヤンキーの人は、「俺はバーをやりたいんだ」と言って、子分を連れてきて2週間に1度バーをやっています。こんな人たちがここで集っています。若い人は、バンド演奏をしていたりもします。

若い人たちが勝手に自分たちが好きなことをやっているように見えるんですが、これはれっきとした総合計画に基づく事業です。だから14ある集落全部が応援しようと言ってくれています。「海士人宿」がある時は年寄衆もちゃんと保育園まで出てきてくれます。年寄はいろんな昔の話を教えてくれたり、若い人は年寄に提案するなど、喧々諤々議論する場になっています。だから音楽演奏やバーというのはネタです。これをネタにして皆集まって話をしたいんです。年寄衆は音楽演奏はなくてもいいんです。正確に言うとうるさいのでない方がいいんです。演奏が終わると「終わった終わった」という感じで話し始めます。

僕たちが色々な活動をやっているけど議員の人たちが見に来てくれなかったのですが、『島の幸福論』から議員の人たちとも仲良くなったんです。「住民の意見を聞いていいことをやっていたらいいね」ということを言ってもらったので、僕たちのプロジェクトを見に来てもらうように何回も誘いました。17人の議員に集ってもらってフェイスブック講座をやったんです。アイパッドを買ってもらって、フェイスブックの「いいね」ボタンのことや、写真を載せると「いいね」ボタンを押してもらいやすいことや、写真の下にコメントを書いておくと皆から意見がもらえることなどを教えました。そうすると議員の人たちが皆町に出て行って、この活動などの写真を撮って、フェイスブックにどんどんアップしてくれるようになったんです。議員の人たちが町の中をよく歩くようになってきて、市民が本当に町で何をしているのかわかるようになり、すごくおもしろくなりました。「いいね」が増えると自慢してくれますし、「いいね」の数を増やそうとして町に出て行くようになりました。それはすごく嬉しかったです。



島のお母さんたちが作ったのが、 “魅力ある高校を作ろう”チームです。

「魅力ある島前高校を作ろう」というのは、島の中で唯一ある高校を残そうというものです。島には4つ町村がありますが、その代表の高校が一つだけ海士町にあります。でも受験生は20年間ずっと定員割れで廃校の危機にありました。それで島のお母さんたちが作ったのが「魅力ある島前高校を作ろう」チームです。

中学生や小学生を抱えているお母さんたちは島に高校がなくなると本土の松江の高校に通わせなければならなくなるので困るんです。結構お金もかかりますし、中学卒業時に島を出ると島に帰ってこなくなる可能性も高くなります。だからなんとか高校を残してほしいということで立ち上がりました。このお母さんたちはかろうじて僕たちがデザイナーだということを知っていてくれて「一緒にやりましょう」と誘ってくれたので、僕たちがチラシをデザインして「どきどききらきら島留学」というコピーを考えました。男としては「どきどききらきら」というのは恥ずかしいと思ったのですが、女子中学生が魅力的だと思うようなコピーがいいと思いました。女子中学生が受験をしてくれないと男子中学生も受験しないですから。

それに島の中学生たちに受験してもらっただけでは数が限られているので、東京や大阪や京都や広島などの中学生にも受験してもらおうということで、都市部の中学校にダイレクトメールを送りました。15,000通ぐらい送って保護者の人に見てもらいました。東京の田園調布あたりのお金持ちのマダムが「うちの子は中学を卒業したらスイスの高校に留学させます」、「オーストラリアに留学させます」なんていうのはオシャレでカッコイイですが、1人ぐらい「うちの子は中学を卒業したら海士町に留学させます」という人がいてもいいのではないかと考える方です。それに海士町も一応海外です。海士町のようなところで3年間ガッツリ人間力を高めてもらって、大学に行く時に東京に戻ればいいのではないかとというようなことを書いたダイレクトメールを送りました。そうしたら願書が殺到したんです。すごくたくさん送られてきたのですが、海士町の教育委員会がそういうことに慣れていなかったで、「せっかく願書を出してくれたのに落とすっていいものか」となったんです。これまで20年間落とす経験がないので、せっかく願書を出してくれた人は全員引き入れたいというふうに思ったんです。それで緊急会議を開いたんですが、1番問題になったのが海士町の中学生が受験で落ちるかもしれないということでした。そうなるとうまくいっているのかよくわからなくなるわけです。それで急遽、役場の中に塾を作りました。海士町には民間の塾はないので公営塾です。公設の塾を役場に作って、海士中の子で高校を受験する子は皆、授業が終わったら役場に行って受験勉強をしました。今は3年目ですが、塾のおかげで海士中の子たちは全員島前高校に受かっています。今は広島、千葉、埼玉、福岡、いろんなところから来て、ホームステイのようにしながら勉強している子たちと一緒に暮らしています。

14 集落を全部回る調査から始めようということになりました。

100人からスタートして4つのチームでしたが、今は300人ぐらいの人が町づくりの活動に携わっています。チーム数も増えました。分裂したのもありますし、新しく立ち上がったものもあります。今は8チームぐらい、町のいろんなところで活動をしています。この300人は放っておいてもやるんです。だから僕たちは仕事として関わるのをやめました。「もう海士町の仕事は終わりかな」と思っていたら、町長が「残りの2,000人の方をみてほしい」と言い始めたんです。2,300人のうち300人は楽しんでどんどん地域づくりの活動をしているんです。でも残りの2,000人はまだ出てきていません。それは一体何が起きているのか？ということで、まず14集落を全部回って調査から始めようということになりました。集落ごとにレーダーチャートを作りました。客観値によるデータと主観値によるデータを一つにするのも実際にはおかしいんですが一つにしています。客観値は国勢調査やGISで病院や学校までの道路距離を出したものです。GISというのは地理情報や国勢調査の人口情報などをかけあわせたようなデータです。それを見ると人口や高齢化率や距離や子供の数などは正確に出ます。ポイント数も全体の平均も出ます。一方、主観値は集落で集まってもらって住民生活の満足度がどれぐらいか皆で相談して適当にポイントを決めました。客観値と主観値を一つの集落レーダーチャートというものにしようということで、集落地を回って寄り合いに出て基礎的なデータとそこの特徴を把握し、今はどんな取り組みをしているのか、これからどんな取り組みをしようと思っているのかを聞いて回りました。まずこれが2009年にやったことです。これによって「左寄り集落」「右寄り集落」という特徴がわかります。

「左より集落」は、人口も結構多いですし病院も学校も近いです。かなり恵まれた境遇にあるにもかかわらず、本人たちはちょっとやる気がなくなっているというタイプです。これはもったいないです。条件は整っているのもっとやる気を出しましょうという話をしなくてはいけないタイプかもしれません。

「右寄り集落」というのは、客観的には全然恵まれていません。学校が近いだけで他は何も恵まれていない集落です。ところが本人たちは「まだまだいける！」と思っているんです。こういう集落はやる気があるのだから、どういうふうに条件を整えていくのかということをやらなくてはなりません。

右も左も両方小さい集落もあります。客観的にも恵まれていなくて、本人たちも「もうダメかもしれない」と思っているところです。そういうとことに活性化しましょうという話を持ち込むかどうかをまず僕たちは考えないといけません。「常に活性化の話が出る。役場の人や大学の先生が来ても活性化の話が出る。もう疲れた」と住民に言われることもあります。本当に活性化に疲れていて、全員で静かに閉じていきたいと思うのなら、村をどういうふうに収めていくかという話をしましょうということになります。そしてそれは僕たちが全力でサポートします。「僕たちは活性化だけをしに来たわけではないです。皆さん

が話し合っただけで村収めをしていこうというなら美しく村を閉じていく方策を考えるべきでしょう」ということを集落の人たちに言います。でもそれを決めるのは集落の人たち自身ですので、僕たちはそれを考える材料をたくさん持ち込もうというふうに思っています。

これで14集落を全部見て、予防だけしておけばまだ今は元気なところ、ちょっと弱ってきたので治療しなくてはならないところ、本当に介助していてこれから小さくなっていくところの最後まで介助策、それぞれを決めました。

集落支援員を募集しました。

町長に提案をして総務省がやっている集落支援員を募集しました。25人の応募がありました。僕たちも行きがかり上応募書類を見て我々と組んでやってもらう人を考えました。その中で一つ間違った書類が入っていました。46歳、元ヤンキーのあの住民の人が応募してきたんです。すぐに電話して「間違っているんじゃないですか？これは集落支援員の募集ですよ」と言ったら「俺はやるんだ」と言ってました。この人は下水道の会社を持っているので「会社はどうするんですか？」と聞いたら、「他の誰かに任せる」と言うので応募の理由を教えてくださいました。海士町は全集落が合併浄化槽なので中村さんは3ヶ月毎に浄化槽のチェックに全集落を回るんです。20年間ずっと集落を回っていて、集落がどんどん弱って高齢化していくのを3ヶ月毎に見ていたんです。でも「これは自分の仕事ではない。役場がちゃんとやればいい」というふうに思っていたらしいです。でも総合計画を2年間一緒に作ってそれが少し変わったんです。この人は、1ターンが嫌いな典型的なタイプでした。1ターンの人のことを「持続可能性とかエコとか、うっとうしいことを言う。頭でっかちだ」と言ってたんですが、実際にじっくり話してみると、「なかなかいいことを言っているらしい。しかもよく勉強している。よく聞くと正しい」ということが段々わかってきて、「自分たちの方が何もしていなかったんじゃないか」と疑問が出てきたらしいんです。その時に集落支援員募集があるのを見て、「俺はこれをしないとダメだろう」ということで応募してくれたんです。これは嬉しかったです。この際、この人にも入ってもらいましょうということで、6人の集落支援員の1人に入ってもらいました。

6人集まったのはいいのですが、集落支援員だけでかたまっていると他の役場職員とのコミュニケーションがとれなくなります。集落を回っているんな課題を見つけて帰ってきても、何課の誰に相談すればいいのかわかりません。顔見知りがないとダメだろうということで、町長に「僕たちが役場の職員の研修をほぼ無料でやりますので30人の若手を出して下さい」とお願いしました。1週間研修をしました。

海士町の最先端の度合いというのを皆に学んでもらいました。日本全体が超高齢社会、人口の比率で22%が高齢者になったのが2007年でしたが、その10年前に島根県は超高齢社会に入っていました。島根県よりさらに10年前に海士町は超高齢社会に入っていたわけ

です。これはもう日本の最先端です。川上村も一緒です。超最先端だと思います。ということは、この川上村の地域おこし協力隊の人、あるいは集落支援の人は、海士町や川上村で抜群のプロジェクトを立ち上げたら 10 年後には島根県全体、奈良県全体が真似をするようになります。さらにその 10 年後には日本全体が真似をするようになります。だからここで最先端のモデルを打ち出せるかどうか、これはあなたたちにかかっていますと海士町の集落支援員には伝えました。

写真や動画の撮り方、編集の仕方、文章の書き方を学んでもらいました。自分の名刺も作ってもらいました。あと、尋ねる、見る、答える、人の話を聞くということも学んでもらいました。人の話を聞く行ためだけでも 4 種類ぐらいあります。整理して聞く、質問を投げかけて聞く、同意して聞く、共感して聞くなど、聞き方は色々あります。本音を聞きだすにはどう聞けばいいのか、そういうことを役場の若手 30 人と共に 1 週間きっちり学んでもらい、集落支援員が誕生しました。

集落の価値や未来について判断できる材料をわかりやすく提示する。集落支援員がやらなくてはいけない仕事は、そこです。

この人たちが集落に入っていきます。会議室に集まってもらって話を聞くということはずりません。川上村も近いと思いますが、やはり集落に出向いて行きます。皆が自然に集まっているところに行かないと人は来てくれません。畑仕事の合間に座り込んでいるところなどに行きます。集落に入ったら、誰が住んでいて、その人は何歳で、息子はどこに住んでいるのか、息子は定年後に帰ってくるのかこないのか、そういうことをずっと聞いていきます。そういうことを聞いていくと、何年後にどこが空き家になるかわかってきます。

平均寿命を基準に、あわせて子供さんが帰ってくるのかどうかを聞いていると、2041 年には人が住まない集落の想定ができます。「これでどうしますか？」ということ。嫌だと言うならまだ人がたくさん住んでいる 2011 年の段階で何をすることを皆で考えていけばいいんです。これは活性化策です。でももう疲れたから活性化は嫌だと本気で言うなら、最後の 1 人が孤立死や孤独死にならないよう皆でサポートしながらどうやって最後の人に平場に移って行ってもらおうのか考えて、集落を美しく閉じていくように考えます。そしてその集落にあった伝統の能歌舞伎や芸能をちゃんとビデオに撮ってアーカイブ化し、ここに集落があった記録を残したうえでどう集落を閉じていくのか、もし集落を復活させることになった時にどの手順で復活させるのか、そんな計画をきっちりと収めたうえで集落を閉じていきたいと思います。という事です。「どちらにしましょう？」と言いに来たわけではないです。材料は提供しますが決めるのはそれぞれの集落の人たちです。活性化したいなら皆で話し合いをしていくだけでもアイデアを持ってきますし、閉じたいならクリエイティブな閉

じ方についてアイデアを持ってきます。だからこれは皆で決めましょうということで話し合いをしていっています。今、海士町 14 集落のうち 1 集落は閉じてもいいかもしれないという話が少しずつ進んでいます。僕はどちらでもいいと思っています。本人たちが決めることが 1 番大事です。僕たちがとやかく言うことではありません。でもそのためにきっちり判断できる材料はわかりやすく提示しておかないといけないと思います。僕たち集落支援員がやらなくてはいけない仕事はそこです。基本的なところでその集落の価値や未来についてどういう条件があるのか、「覚悟を決めるのなら一緒にやってみましょう」ということを言わなければいけません。それとともに集落支援員自身が覚悟を決めないといけません。

仕事によって集落を支援できる、そんなトシのきいた職業を自分で見つけてもらうように言っています。

集落支援員には総務省から予算が出ています。人件費 260 万円と活動費 100 何十万円、合わせて 400 万円弱です。このお金は 3 ~ 4 年でなくなります。お金がなくなったら集落支援員は給料がもらえなくなります。もらえなくなったから集落支援をやめたというのでは覚悟がなかったようでちょっとカッコ悪いだろうということで、最初から「独立してください」と言っています。集落支援員を採用する時にまず開業届けを出してもらっています。全員に屋号を決めて税務署に届けてもらって青色申告をしてもらっています。65 万円控除で起業してもらっています。だから 3 年間の間に仕事をしながら集落を支援できる、そんなトシのきいた職業を自分で見つけてもらうように言っています。それを僕たちはサポートします。集落を回りながら起業のタネを見つけようということです。

空家調査をしたりおばあちゃんのところへ行ったりすると、蔵や倉庫に何十年も手をつけたことのない物の山があるんです。家の人も何が入っているかわからないんです。それを掃除してほしいと言われた時に、中にあるものをもらってこることができるんです。中にあるものは別にお宝ではなく、30 年前にもらったお茶碗のセットやスプーンのセットなどですが、それらを掃除するためにもらってこることができます。あと、子ども部屋だったところが荷物でいっぱいになっている場合なんかも荷物を全部引き取ってこることができます。他にも、空家が倒れそうになっている時なんかは解体しないといけないのですが、持ち主が博多に住んでいる息子さんの代になっていたりすると電話で地元の工務店に解体を依頼してくるんです。島には工務店が 3 つしかありません。集落支援チームは島の工務店と解体の依頼があった場合は解体を 1 週間遅らせて僕たちに知らせてもらい、解体までに家の中にあるものを僕たちが引き取るという約束をしています。解体費用の 3 分の 1 は中にあるものの処分費です。工務店としても先に中の物を外に出してもらえれば解体費用が安くなるので嬉しいわけです。だから僕たちのところに必ず電話をしてもらうよう

に言っています。こういう空家には自力で処分できないものがいっぱいあります。だから集落支援員はここを回って、いいと思うものをどんどんもってきています。

古道具をいっぱい引き取ってきて古道具屋をやるということになってきました。だから6人全員に古物商の免許を取ってもらって古道具屋を自分たちで開業できるようにしてもらっています。オシャレな古道具屋さんはどこなところがあるか東京や大阪や京都に見に行きましたし、修理の講習会もしています。ちょっとしたものなら自分たちでリペアできるようにしました。

それで、今は保育園の空いている部屋にどんどん物を集めてきています。ストックしては物を洗って、改装した古道具&カフェというオシャレなカフェに置いて販売しています。自分たちがかわいいと思う大正時代の器などを100円や200円や500円で販売しているんですが、島の若い奥さんに結構人気です。1ターンの人たちは家族分だけしか食器を持ってきていないことが多いのですが、島ではいろんな人が来ますので食器が足りないことに気づくんです。それでこういうところに来て、安いからどんどん買う。だから今はすごく売れています。古道具&カフェはやり始めてもう1年半になります。島では珍しいことなんですが、駐車場が満車になっていたりします。かなりの人が買い物に来てくれています。どんどん売れて、月の売り上げが大体20~25万円ぐらいです。仕入れ値が0円なのでそのまま利益です。20万円で何人ぐらいの集落支援員が食べていけるかみたいなことを計算しています。島で一軒家を借りたら5,000円ですが、集落支援員はシェアハウスをしていますが1人の家賃が1,000円ぐらいです。食費はほとんど0円です。集落支援をするとほとんど毎日玄関の前に野菜が置いてあります。塩も横に置いてあって、大根と塩のコンビになっていたりします。海士町は島なので魚も届くんです。集落支援でおばあちゃんたちを助けたりすると食べきれないほど食べ物が届きます。集落支援員の1番かかっているお金はコンタクトレンズと携帯電話のお金です。この二つに2万円払うのが痛いんです。でも他にお金は使わないので1人5万円ぐらいのお給料があれば、2万円使って1~2万円は貯金できるということです。じゃあ20万円なら4人ぐらいは食べていけるし、売り上げが上げれば6~7万円もらえるという感じです。このように、それぞれが仕事をしながら集落支援をしていく体制を今整えつつあります。今は2年目で、もうそろそろ総務省に補助金はいらないと断ってもいいのではと言っているぐらいです。

集落支援員は結構活発に情報発信もしています。グーグルで「集落支援員」と検索してもらくと1番目と2番目と3番目に出てくるのは総務省のページですが、3番目に出てくるのは海士町支援員のフェイスブックページです。結構上に上がってきました。いつか総務省を抜いてほしいと思っています。海士町集落支援員は結構頑張っています。

あとは「結婚活動支援員」というのもやりました。海士町は少子化なんです。50歳の漁師さんと70歳のお母さんの2人暮らしとか、単身の男性世帯なんかがあるんです。うちのスタッフが結婚活動支援員として島に常駐して、人と人をつなげて結婚させるというプロジェクトを2年前ぐらいに1度しました。でも僕たちはその専門ではないので、これはな

かなか厳しかったです。自然にひつつくことはありましたが、ひつつくことを目的にすることはなかなか恥ずかしくてできませんでした。でも 1 ターンで東京などから来る若い子たちが帰ってしまわないで島の若手と結婚するようなきっかけはどうしても作りたいと思いました。それは島の人たちとワークショップをしても仕方がないので東京の女子大生たちとワークショップをして、女子大生が島に行って自然な形で島の男性と付き合って結婚するためには何が必要かを考えました。

「ないものはない」

会社の名刺を作るワークショップもします。その会社が芸能人で例えるとどんな会社として外から見られたいのかみたいなことを皆で話し合っています。名刺一つ作るにしても、会社の人たちのコミュニティを作らないといけませんし、語れる名刺になっていないといけません。その人たちと一緒に作った名刺であることがすごく大切だと思っています。

ちなみに今海士町が使っている名刺も僕たちが海士町の若手職員と一緒に作ったものです。若手職員とワークショップをして、海士町の売りは何かなどコピーを 100 種類も考えてもらいました。「自然豊かな」などたくさん出ましたが、結局「ないものはない」という名刺になりました。海士町と書いてある下に「ないものはない」というロゴが書いてあります。

一橋大学を卒業して海士町に 1 ターンで入ってきた若い人のアイデアです。一橋大学の近くに教科書も物差しもペンもハサミも何でも売っているなんでも屋というところがあって、1 年生はそこで何でも安く揃えられるそうです。そのなんでも屋のおばちゃんが店の前に「ないものはない」と書いているという話をしてくれました。「ハサミはありますか?」「ある」、「物理の教科書は?」「ある」という感じで全部「ある」らしいんですが、何かを聞いた時だけ「それはない」と言われたらしいんです。「ないものはない」って書いてあるじゃないですか?」と言うと「だから「ないものはない」って書いてあるだろう」と言われたらしいんです。「ないものは一つもない」という意味と「ないものはないんだから仕方がない」という 2 つの意味があるんです。「これはウマイ」ということになりました。海士町は離島なので、考えようによっては「自分たちの生活に必要なものはなんでもあり、ここにはないものはないんだ」という意味と、「うちにはないものはうちに必要なものではないんだから、ないものはなくていいんだ」ということで、それをコピーにしました。だから今の海士町の名刺や封筒やポスターには「ないものはない」と書いてあります。



この人たちがいかに面白いか、

どんどん人を紹介していくガイドブックを作っています。

海士町で最後にやったのはコミュニティトラベルガイドの出版です。去年ぐらいに出版しました『海士人』です。

人に会いに行く旅というものを提案したいと思ったんです。「るるぶ」や「JTB」のように美味しい食べ物や歴史のある神社があるから旅に行きましょうというのも悪くないですが、人に会いに行く旅というものがあってもいいじゃないかと思ったんです。読めばきっと会いに行きたくなるようなトラベル雑誌、そういうものをコミュニティトラベルと呼べないかなと思いました。そのガイドブックの第1弾を海士町から出しました。名所旧跡や美味しい食べ物や旅館は掲載していません。紹介しているのは人ばかりです。この5年間海士町でワークショップをして、本当に面白いと思った人がいっぱいいたんです。その面白い人のキャラクターの部分进行全面に出していくガイドブックがあってもいいと思ったんです。「隠岐神社」という神社を紹介するのではなく、宮司の村尾さんを紹介するんです。

先ほど出ました一橋大学卒業の人なんかも、なぜか海士町に入ってきて民宿で修行をし、今はなまこばかり育てています。なぜなまこを育て、それを中国に売っているのか、彼の熱い気持ちをこの雑誌に書いています。彼に会いに行ったらたまたま民宿だった、そういう順番で町のことを知るのはいいのではないかと思います。

梅干ではなく、作っているおばちゃんたち、ハーブティーではなく、作っている施設の障害者の人たち、郷土料理ではなく、島のお母さんたち、スナックもママたちを紹介しています。この人たちがいかに面白いか、そういうことを載せたいんです。古道具&カフェも支援員たちが何をやっているのか、そういう感じでどんどん人を紹介していくガイドブックを作っています。『海士人』は今、アマゾンで買えます。840円です。福井からも同じようなものを出してほしいと言われ、第2弾として『福井人』というのも出しました。今は『三陸人』と『瀬戸内人』というのも作ろうということになっています。こういうものの依頼も結構入ってくるようになりました。もはや何屋さんかわからないような状態になってきています。



地域づくり、町づくりというのは世のため人のためではなく、
その本人の幸せづくりだと思っています。

今、早口でざっとお話したようなことがやっている仕事です。

一つの地域に入った時に、最初にコミュニティデザイナーとして総合計画を作るためにチームを作って計画書を作りました。計画書ができることも一つの目的ですが、もっと大きい目的は、活動するチームをきちんと作ることです。コミュニティを作ること。その人たちが自身が活動する中で、より課題となってきた別の側面をそれなりにまたお手伝いし、求められればその時々によってやり方は変えていきます。一つの地域に入ると4～5年ぐらいは色々な形でお手伝いしますが、徐々に僕たちのやることはなくなっていっていきま。海士町では2011年に僕たちがやることはほぼなくなりましたので、島の仕事はもうお断りしました。今はどうしてもということで一つだけ、新しい集落支援員が入ってきたのでその支援だけはしていますが、1ヶ月に1回ぐらい、うちのスタッフが相談に乗るぐらいです。本当はもうそれも海士町の人たちだけでやっていけるはずなんで、来年度はもうなくなると思います。なるべく早めに僕たちは仕事をなくしていかなくてはいけないんです。他にもお手伝いをしなくてはいけない地域が日本にはたくさんあります。だから早め早めに地域の人たちが活動できる状態を作って、僕たちは地域から消えていくのがいいんです。ちょっと寂しい仕事です。皆とすごく親しくなって楽しくなってきた時に自分の仕事を減らしていかないといけないんです。でも結局地域の人たちが動かないと仕方ないんです。

僕は10年間ぐらいこういう仕事をしてきて常々思っているのは、地域づくり、町づくりというのは世のため人のためではなく、その本人の幸せづくりだと思っています。遠回りをしない幸福論です。

今はアベノミクスが流行りですが、お金を媒介にした幸福論を目指さなくてもいいのではないかと思います。もちろんお金が必要なところもありますが、何もかもそちらを目指すのはしんどいです。例えば「今の状態は景気が悪いのでアベノミクスで景気さえ回復してくれば売り上げや給料が上がるのに」とよく言われますが、でもその先どうなるんでしょう？売り上げが上がって給料が上がれば何が嬉しいのか理由を考えると、欲しいものが買えるということだと思います。同じ車でも給料が上がると8人乗りの大きい車を買えるということです。8人乗りの大きい車を買えると何が嬉しいのか考えると、車が目的ではなく、思い出ということだと思います。「8人乗りなら皆で車で旅行に行って美味しいものを食べたりして友達の絆を再確認できる。そのために8人乗りの大きな車が欲しい。だから給料が増えるために景気がよくなれないといけない」ということだと思います。でもこれはかなり遠回りだと思います。もしその目的が皆で美味しいものを食べて友達の絆を再確認することなら、今日皆で空家に持ち寄って美味しいものを食べて「俺たち友達だな」と言えばすぐに目標に到達できます。だから今できることはすぐにやっちゃいましょう

ということです。

地域づくりということを名目にして、町をよくするためだからと言いながら自分たちが楽しいことをそこに持ち込んでしまえばいいと思います。「あの子と付き合いたい」「気になっている」ということを地域づくりに巻き込んでしまってもいいと思います。「うちの店の売り上げを上げたい」と思っている店前の商店街に人が歩いていなければどうしようもないので、どうすれば人が歩くようになるのかを「中心市街地活性化」なんていう言葉をうまく利用して参加してしまえばいいかもしれません。とにかく自分たちが今やりたい、これができたら楽しい、幸せだと思うものを全て持ち込んでくればいいと思います。結果として誰かが感謝してくれるような活動ができるのだったら、皆にとってもいいし、自分にとってもいいことになると思います。あまり景気回復に一喜一憂しても仕方ありませんし、そんなに遠回りして絆やつなかりを再確認するぐらいなら、今日この後からでも皆で名刺交換したり美味しいものを食べたりして、ここにいる人たちでつながってもらえばいいと思います。それが地域づくりではないかと思えます。

「ほな、もう寝てます」。これは江戸の小噺です。江戸時代の話で、若者がずっと寝て働かない話です。道端でずっと寝ていて、そこに老人が来て「いい若者が昼間から寝てばかりでどうなんだ？起きて仕事したらどうだ」と言うと、若者が寝たままで「仕事したらどうなるんです？」と聞くんです。「仕事をしたらいつかお金持ちになれるじゃないか」「お金持ちになったらどうなるんです？」「お金持ちになったら毎日寝て暮らせるじゃないか」「ほな、もう寝てます」という小噺です。そんなに遠回りして寝なくてもいいのではないかということです。幸せというものがもし自分の目の前の地域の中にいっぱいあって、きっかけさえあればそれを手に入れられるのだったら、アベノミクスとはちょっと違ったところで自分たちの幸せを掴んでいくことは可能なのではないかとよく思います。

地域づくりでは3つの輪を重ね合わせましょうといつも言っています。

まず楽しくないといけません。私たちがやりたいことです。できることでないといけません。やりたいことをできる範囲でやっているのだったら趣味の段階です。これを地域が何を求めているかというところまで引き寄せて、3つが重なるところで企画すれば、自分たちがやりたいことをできる範囲でやっています、地域の人たちから「ありがとう、やってくれて助かります」と感謝されます。感謝されれば嬉しいのでまた活動します。そういう動きにつながっていくのではないかと思えます。



既に地域の方々の頭の中にいいアイデアがあると思います。
それをうまく紡いでいくのが、
コミュニティデザインの仕事ではないかと思っています。

先ほど紹介した海士町の人たちは皆自分たちが楽しいと思うことをやる範囲でやっていて、常に地域で困っていることをリサーチしています。これは1回話し合いをすればいいわけではなく、毎年棚卸しをしてもらった方がいいと思います。やりたいことが去年に比べて増えていたりします。事例を色々調べていたら上勝町で面白いことをしていたり、八戸の商店町の「うわさプロジェクト」が面白いらしいとかわかってきます。そうすると自分たちもやってみたいと思い、やりたいことが増える可能性があります。増やしてほしいんです。

仲間も増やして、できることも増やしてほしいです。パソコンの達人や人前で話すのが上手い人やデザインできる人、もしくは自分がフェイスブックを作れるようになったなど、チームの人たちでできることも増やして行ってほしいんです。それから地域が何に困っているかも知ってほしいです。

すると、これからやりたいと思うことが毎年増えていくということです。活動団体はやっている活動に飽きてくると段々人が少なくなってきます。そうではなく、「やりたいこと」、「できること」、「地域が求めていること」を毎年棚卸しし、やりたいと思う企画を毎年大きくしていく。そういうことが持続的に活動していくうえで大事になっていくと思います。

これはよくお話ししていることですが、かつては住民がこの税金を納めて、その税金分だけ行政が予算を組んで公共的な事業をして、公益的なメリットが住民に返ってくることをしていました。でもこれからは生産年齢人口も減ります。どの自治体もそれぞれ人口が減っていくので交付税を減らすと安倍内閣も言っています。そうすると行政だけで公共的な事業を全部支えられた時代とは違う時代がやってきます。これから住民は税金を納めるだけではなく、公共的な事業を自分たちが参加することによってうまく支えていき、今と同等かそれ以上の公益的なメリットを住民に還元させないといけないうらうと思います。その時に、単に行政のお手伝いのようになっていたらダメなんです。お掃除ボランティアとかアダプト制度のように「ここからここまで水やりをしてください」みたいにだったら3年もしたら「なぜこんなことをしているのか？」というふうになってきます。自分たちがやりたいと思っている企画をやればやるほど地域のためになる、そこをどうやってうまくデザインしていくかが大事です。そこは僕たちもお手伝いできますし、既に地域の方々の頭の中にいいアイデアがあると思います。そういうのをうまく紡いでいくのがコミュニティデザインの仕事ではないかと思っています。

僕たちの仕事はもうすでにあるコミュニティの方々に2～3年一緒に活動することによって、フェイスブックが使えるようになったり、チラシのデザインがカッコよくなったり、

パワーアップしたりなど、やれることを増やしていくお手伝いをする事です。パワーアップしただけではなくて新しい仲間を手に入れることができたと言われることも嬉しいことです。あるいはそんな活動に今まで全然参加していなかったり、子育てで忙しかった人などが一緒に何かする間に小さなゆるいチームになった、そういうことがあればいいなと思っています。

行政の方から頼んでもらうことは総合計画づくりや商業施設づくりなど色々ありますが、これは全部住民参加でやります。計画書が出来上がるのも一つの目標ですが、もっと重要な目的はその活動主体ができるということです。合意形成と主体形成を同時にすることが今僕たちがやっている仕事かなと思います。

このゆるいつながりというのは強いつながりと同じくらい大事なんです。社会学では強いつながりのことをストロングタイズ、弱いつながりのことをウィークタイズと言います。タイというのはネクタイのタイのことですね。絞めるということです。要するに人と人がつながる時、強いつながりと弱いつながりを持っているんです。家族や職場は比較的強いつながりです。ところが家族や職場はつながりが強いだけに会話の範囲は狭いです。仕事に関することや家族に関係することしか話しません。一方こういうつながりは弱いつながりです。弱いつながりは利害がないのでどうでもいい話を広くします。そういう時に自分たちの悩みを打ち明けやすくなるというふうに言われています。家族にも職場にも言えない話をこのチームだったら言えるんです。弱みを握られてもいつ抜けてもいいし、もう1度帰ってきてもいいからです。だから相談してみようかなと思うわけです。町をうまくマネジメントしていこうと思うと、強いつながりだけではなく、海士町で言うと「人チーム」「産業チーム」「環境チーム」のようなゆるいつながりがすごく大切だと言われています。僕たちはむしろゆるいつながりの方をコミュニティデザインの仕事を通じて作っていくことができればいいと思っています。

今はウツが100万人以上いると言われていています。潜在的には300万人もいると言われていています。自殺者が3万人弱、孤立死も3万人だと言われていています。毎年東日本大震災の被害に遭った2~3倍の人がつながりがないという状況の中で命を落としています。そういうことが毎年起きているのは尋常な国の形ではないだろうと思います。僕たちはこの種の仕事をしながら、少しでもゆるいつながりを増やしていくことができればいいなと思っています。

海士町でも、報告書や計画書ができたことが一つの成果かもしれませんが、「海士人塾」が成功したこともよかったかもしれないし、それぞれのチームの中で、ゆるいつながりというものができあがっていたというのが、本当のところ僕たちが「成果」と呼びたいものだというふうに思っています。

ということで、ちょっと駆け足でしたが以上で僕の話は終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。



講演が終わった後も、参加者の笑顔と人の輪がなかなか絶えなかったことも印象的でした。



現地（知）講座「この村で、できること」

2013年9月8日（日）10:00～15:00 村内ミニバスツアー

事務局（この回のねらい）

毎年川上村にて開催し、吉野川・紀の川流域の市町村や川や水のことに意識をもって活動する団体や個人が参加する「源流まつり」の日にあわせ、3回目の講座に向けて、わずかでも川上村のことを知り、潜在する活用要素などについて共有をすること、そして村内・外からの参加者の交流を目的としたミニバスツアーを開催しました。

1回目の講座では、単なる聴衆であった川上村地域おこし協力隊「かわかもん」のメンバーたちが、企画段階から参加し、川上村から伝えたいこと、出会ってみたい人や場所について考え、自ら当日のガイド役を担いました。

行程

10:00	川上村	宮の平	源流まつりオープニング見学
10:50		粉尾	樽丸工場見学
11:50		中奥	チゴロ淵 人工美林見学
12:30		北和田	大阪工業大学「源流分校」(旧小学校跡) ・シカ肉カレーと地元産お茶で昼食 ・学生による教室改装プロジェクト見学
14:00		宮の平	源流まつり合流 ・バス内を展示ブースとしてPR参加
15:00			・映画「森聞き」観賞 (森の聞き書き甲子園ドキュメント)
17:00		終了	



参加者に配られた「ツアー・チケット」
この日のプログラムとともに
各場所での感想をチケットに記入し
「運賃箱」に入れるという趣向。



この日行われていた「源流まつり」には
吉野川紀の川流域から活動団体が出展。
「かわかもん」はバスをテントに見立て
“動く展示” & “動くワークショップ”を展開。



「樽丸」とは、酒樽に組まれる円弧型に加工した杉材。
江戸時代中期に始まり、
吉野林業は、「樽丸林業」とも呼ばれていた時期もあります。
現在、「重要無形民俗文化財」に指定された技を
川上村で見ました。

樽丸工場



300年近く前から今日まで、
連綿と手入れを続けてきた美しい人工林があります。
使うために植え、育て、循環を守ることで保たれる森の姿。
自然のしくみと人の思いにつながれてきた吉野林業の大きさを感じました。

チゴロ淵人工美林



古い伝統と技、長い歴史が生み出す素材をいかしてきた村で、
いま新しい動きが始まっています。
都会の大学との連携によるものづくり。
都会から移住し、地域を元気にしたいと考える若者たち。
人が出会い、つながり、そして広げ、考える第一歩として、「今日」を共有しました。

大阪工業大学「源流分校」

廃校となった小学校の教室を学生たちがリノベーション。
大人は心落ち着き、
子どもは大はしゃぎするほど
何か「よい空間」でした。



元給食室で、懐かしい給食のように、地元産シカ肉入りのカレーで昼食。
わいわいと楽しい「給食の時間」となりました。





後日参加者に送付した
レポート。
参加者どうして感想を共有。



かわかもんバスツアーにご参加いただいた皆様へ

先日はかわかもんバスツアーにご参加いただきましてありがとうございました。

また、バスチケットを通して、皆様の貴重な声を数多くいただきましたこと、重ねて御礼申し上げます。

バス車内の書きにくい状況で難しかったですか？
文字が書えなながらも、頑張って書いていただいた文のくすね紙の声を後の思い出に。

今回、Kawakamon Bus Tour Reportとして形にしました。

このレポートを見て、川上村のことを思い出していただければ幸いです。

ではまた、お会いしましょう！

平成 25 年 10 月吉日
川上村地域おこし協力隊
かわかもん一同

かわかもんの皆様元気でやる気まんまんですわー。
何だぞん家ついでにきょう！
南朝・後南朝の歴史に思いがけず参加しました。
何故も来ていますが、今回は吉野川の歴史や水の源りが
癒やしく感じます。(先年の台風もあり)
一番嬉しいことは、後南朝の歴史がわかる金剛寺で
おまつりに参加したいです。誰といえはやはり
一の宮様とす！？および二の宮(ガイドブック)
このイベントをきっかけに早く新編編纂にとりかきたい。

友達とキャンプしに来たいです。
全体として川上村は「水」という
資源が中心にあるように思った。
例えば大学の材料科の学生フィールド
として利用できるのではないかと。思った。
リポートした学校を拠点として
吉野川の歴史や実作業を学べると思う。

家族と一緒に、ここでできない
ことは何でもやってみよう
(カヌー、釣り、登山、山登りや郷土料理作り etc.)

家族と川べりで
のんびりと一日過ごす。
たき火で火遊びをする。

家族で川原でつりを
したり釣ったり
杉の木の中でかくやぶ
と楽しみたい

清流の水のきれいな
ところでのんびり

たくみのむらで家ごと
コテージにとまりたい

親子で川遊び

川上の村で沢遊び

自然のなかで
・いろんな人と
・のびのびと
・のびのびと

川上小学校で
家族と泊まりたい

サイクルが壊れる危険に閉口
下から見上げる。
わぁすげー！
素材が良いと言葉が
無くてもいいですね。
チョンマゲの人が
嬉しかったなあ
人の手の入った森も美しい
日本と足元の緑の
コントラストが
美しいですね。
川で泳ぎたい
川で泳ぎたい
見上げるほどの水
人工林の植物学的な面白さ羨しさを満喫できますね。
でもやはり山頂草や花などは少ないのかな？
山ガール、特に山岳さんは
植物や写真撮影が好き人が多いです。(実はこの私も)
コースを整備して必要だったら植えたりして
自然と調和を築きあえるようになると子どもたちも喜ぶ

森が遠くておもしろい。
思ったよりサクサクだった！
靴紐としての流通？
えっ！！シカ！！？って思ったけどおもしろかったー！
ガレージ以外の案内料理に
次々挑戦してみたいと思います
シカ肉がやわらかく焼けておいしかったです。
食べながら、知り合いが増えました。
おいしかった。今度は BBQ で食べたい。
準備はさっぱりしていておいしい

やわらかでも
かたいようなふわふわ

川上小学校で
家族と泊まりたい

川上小学校で
家族と泊まりたい

交流講座「それぞれに、できること」

2013年10月26日(土) 13:30~15:30 川上総合センターやまぶきホール

事務局(この回のねらい)

台風の大雨が心配されましたが、無事開催することができました。皆様にはお集まりをいただきましてありがとうございます。

本日、全体の進行を務めます公益財団法人吉野川紀の川源流物語、事務局長の尾上と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

ではさっそく山崎さんをお招きしたいと思います。山崎さんには6月にもこの川上村にお越しいただきまして、川上村役場で「コミュニティデザインとは」といったお話をいただきました。忙しい山崎さんに対して、川上村にとっては、非常に贅沢な、非常に嬉しい機会を作っていただきました。本日までの間に1度、コミュニティデザイン講座として、バスツアーも実施しており、今回が最終回ということであらためて山崎さんにお越しいただきました。

本日はできるだけ、お集まりの皆さんにも色々とお声をいただきながら、普段地域づくりに参加される中で困っていることや山崎さんにアドバイスをいただきたいことなどをぶつけていただければというふうに思います。それではまず山崎さんの方からコミュニティデザインや山崎さんの仕事について少しお話をいただきたいと思います。



山崎

人と人がつながるような仕組みをどうやって作っていくか

考えて実行するというのをやってきました。

改めまして山崎です。どうぞよろしく申し上げます。

簡単にコミュニティデザインってなんだということをお話しておこうと思います。

もともと僕は公園や庭の設計デザインをする事務所に勤めていました。公園を設計するだけではなく、できあがった公園を市民の人達とどういふふうによく使いこなしていくのかという仕事をやり始めました。2005年にその事務所から独立しまして今のような仕事を始めました。公園を造るのではなく地域にいる人達と一緒にその公園を使いこなしていきましょうというような仕事をやるようになりました。公園でそういうことができるならデパートでもやってくれないかということになって、デパートの仕事をやるようになって、デパートの仕事がちょっとうまくいったら、じゃあ商店街はどうだ、中山間地域の集落はどうだ、住宅地はどうだ、医療施設はどうだということになって、徐々に仕事を頼まれるようになりました。頼まれると「じゃあやってみようかな」となって、そこでまた人と人がつながるような仕組みをどうやって作っていくかということを考えて実行するというのを何回かやってきました。

今日ははじめに、香川県の小豆島町でやっているコミュニティアートのプロジェクトについて自己紹介代わりに話をしようと思っています。

小豆島は瀬戸内海にある醤油で有名な島で、醤油の蔵が結構たくさんあります。家島という小豆島のすぐ隣にある島でもプロジェクトをやっていたんです。家島で5年ぐらいこういうコミュニティデザインや街づくりの仕事をやっていて、その時になんとなく瀬戸内海の島の特徴みたいなものを把握した気がしていました。瀬戸内海の離島は要らなくなったものを最後まで使いたおす技術に長けた人が多いんです。例えば使わなくなった冷蔵庫は廃棄処分になることが多いのですが、島の場合は陸続きよりも廃棄処分のお金が数千円とすごく高いので、廃棄処分にしないんです。だから島の人達は使わなくなった冷蔵庫を使って何かしようとするんです。それがすごく特徴的だなと思いました。僕達が最初に島に行ってフィールドワークをした時におもしろいと思って写真を撮っていた中に、畑の横に冷蔵庫が置いてあるというのが結構ありました。冷蔵を開けるとクワなどが入っているんです。農機具小屋として冷蔵庫を使っているんです。これは離島ならではのなと思いました。要らなくなったものをうまく使いこなしていくという能力は必然的に高くなっているのではないかと思いながら、家島でプロジェクトを5年間やらせてもらいました。

2012年の時に瀬戸内国際芸術祭への参加を依頼されました。人と人をつなぐことをデザインとしてやっていきたいと思っているので、コミュニティの方々と一緒にアート作品を作って、そのアート作品を作っている間の笑いや涙など住民同士と一緒に色んな行動をしている間につながりができてきて新しいコミュニティがそこに生まれる、そのつながり自

体が我々が作りたい本当の作品だという言い方にさせてくれるように言いました。

小豆島にまずフィールドワークに行かなくてはなりません。神戸港からフェリーで4～5時間かけて小豆島の坂手港まで行きます。小豆島も要らなくなったものを使う能力に長けている島だろうと思って上陸しました。醤油やそうめんやオリーブの話は聞いていました。

要らないものはないか探そうと思っていたら、港のすぐ前にプレハブが建っていて「観光案内所」と書いていました。その観光案内所を運営しているのが地元のNPOで、名前が「んごんごクラブ」でした。「んごんご」というのは方言で、小豆島でしか使っていないらしいです。「んごんご」は蝉の幼虫のことらしいです。蝉の幼虫が好きで好きでたまらないお父さん連中が結集したのがNPO法人「んごんごクラブ」なんです。その「んごんごクラブ」が観光案内所を運営していて、観光案内所と書いてある文字は蝉の抜け殻を1つずつセロテープで貼り付けて作ってあるんです。とても気持ちが悪いです。お父さん達は「いい看板ができたな」と思っているみたいなんです。僕達が見るとちょっとグロテスクです。蝉の抜け殻が色んな方向に貼り付けられている観光案内所です。不要なものを再利用するという島の流儀がもうすでにここにもあると思いました。だから港に着いた瞬間から「いける」と思いました。ここは家島と同じように要らなくなったものを使ってアート作品を作るとか、たぶんできるだろうと思ったんです。



作業をしながら、いろいろな話し合いができるようになりました。

住民の人に「一緒にアートの作品作る人募集」とやったら50人ぐらいの人が集まってきました。この50人の人達と最初にやったのが島の中で要らなくなっているものを探すことでした。皆で歩き回って写真を撮ってきました。要らないものは色々ありました。醤油を作っているのだから醤油の樽や絞った後の絞り布、タンクやケースやパレットなどもありました。オリーブも有名ですが、オリーブの剪定枝などもありました。

全部集めてみて、僕達が面白いと注目したのは醤油のタレビンというやつです。これは使えそうだなと思いました。醤油が有名なのでお弁当の中に入っている小さなタレビンの中に醤油を詰める工場というのもあるんです。醤油のタレビンは鯛など魚の形をしたものなど色々あります。醤油を詰める工場はそれをたくさん仕入れてくるらしいです。500個や1,000個買っても単価が高いばかりなので10万個とか発注するらしいです。そうすると1個あたりの単価がすごく安くなるそうです。でもお弁当の規格が変わると醤油の量が変わります。エビフライが3本から1本になると醤油の量はそんなにいらなくなるので、小さい方に変えてほしいと言われるんです。だからお弁当の規格が変わるたびに醤油のタレビンの大きさを変えなくてはいけなくなるんです。10万個発注して3万個詰めた後にお弁当の規格が変わると7万個余ってしまうわけです。だからそれを倉庫に入れたまま違うものを発注します。でもタレビンには期限があるらしく、何年も使えるものではないらしいんです。古くなってしまったものはどうしようもないんです。

300個入の醤油のタレビンの袋がこの紙袋の中にいっぱい入っているんです。その紙袋が社長の後ろにいっぱい積んでありますが、山ほど余っている状態になっているんです。工場に話を聞きに行った時、社長が「とにかく余って余って困っている」と言っていました。「それじゃあこの醤油のタレビンを僕達がアートの作品で使いましょうか」という話をしました。

そうやって「要らないものフィールドワーク」みたいにして街の中を歩いていたら、夜はその参加者の50人の人達と一緒にご飯を食べに行くことになるんです。ご飯を食べに行くと島なので刺身など色々出てくるんです。その刺身の醤油に小豆島の人達は皆厳しくて、醤油が透けていないと怒るんです。醤油皿の下の模様が見えないと「酸化していて下の模様が見えないじゃないか」と言って食堂のおばさんに怒るんです。おばさんもよくわかっていて、「はいはい」と言って新しい醤油を出してくれます。小豆島人は醤油を透かして鮮度を見るんです。醤油を透かすという文化を僕達は見たことがなかったので、「すごい、小豆島ならではのじゃないか」ということになりました。

それで、醤油を光に当てて透かすというようなことと、醤油のタレビンみたいなものが何か使えないかなと思ったんです。更には僕達が割り当てられた展示会場が元々醤油組合が入っていた建物だったらいいので、「これはもう醤油にこだわるしかないな」と思って住民50人の人達と話をしました。

アートの作品はルールが一応あるので、そのルールにのっとってアートの分脈の上にとのせていくか戦略がいますが、そのことを皆と共有したうえでどういう作品を作ろうか考えました。それでタレビンにいらなくなった醤油を詰めていこうということになりました。酸化した醤油は家庭にいっぱい余っていたりするんです。醤油工場でも捨てなくてはいけぬ醤油などがありますが、塩分を含んでいるのでそのまま流せないんです。そういういらなくなった醤油を集めてきてもらって樽にどんどん混ぜて入れていって、それを飽和食塩水でどんどん薄めていきました。それを先ほどの醤油のタレビンの中に入れて後ろから光を当てるとキレイな影ができるんです。それで「こういう作品を作ろう」という話になりました。

先ほど言っていた醤油会館は突き当りの壁のところ窓があるんですが、その前に醤油のタレビンで1面の壁を作ろうということになりました。「後ろから光を当てると1面の壁が光る、そんな壮大な作品を作りましょう」と住民の人達と話を決めて決めました。

最後は僕達が「こんなものを作りましょう」と提案しなくては行けないのですが、それまでの間、要らないものはどんなものかとか、どんな作品を作りたいかなどは50人の住民の人達と話し合っていて決めていきました。でも自分達で言ったのはいいのですが、最後の最後にこういう提案が出てきたら住民の人達は若干機嫌が悪くなってしまいました。醤油会館の1番奥の壁を1面タレビンで埋めるのはどれだけのタレビンがいるのかということになって、「ざっと試算して8万個です」と言うので、「誰がそれを詰めるのか」と言うので、「皆さんです」と答えると会場の雰囲気はものすごく悪くなりました。でも住民の皆さんが途中で自分達で言ってしまうことなので、「仕方がない、じゃあやろうか」ということでやりました。住民参加型で皆でチュウチュウ醤油を詰めていました。段々要領を得てきて3人1組でやっていました。最初に醤油を詰める人、次に蓋をする人、最後に漏れた醤油を水につけて洗う人という3人1組です。それをずっとやるんですが、やっている間は暇なので話をします。色んな話をする中で、街づくりの話もやっぱりします。「醤油の壁を作ってどうするんだ?」、「壁ができたならこの空間でカフェなんかするのはどう?」、「カフェで何を出す?」、「醤油アイスなど出したらいいのでは?」、「カフェが儲かったらどうする?」、「儲かったら街づくりのことに使えばいいのでは」という感じで、3人ずつ小さく話し合いをしていってもらっていました。2時間ぐらい作業して、最後にどんな話をしたかメモをして帰ってもらっていました。そうすると作業中にずっと話し合いができるようになりまし



た。次に来た時はまたコンビが変わるので、またその人達と一緒に色々します。

8万個だと50人のメンバーでは全然足りないの、幼稚園や小学校に行っては詰めてもらっていました。あとは老人ホームや障害者の人達にも手伝ってもらってどんどん作りました。それをアクリル板にシリコンで貼り付けて立てていきました。透けないところも出てくるんですが、透けないところは黒い醤油でグラデーションを作っていました。

街の電気屋さんも参加して、ちょっと暗い所が出てくるので均等に照らすための企画をしているところです。役所の人達が小豆島の醤油工業組合だった頃の看板も見つけてきてくれたので、それも使って醤油のタレビンのアートができました。

瀬戸内国際芸術祭は瀬戸内海にあるいくつかの島の中に色々なアート作品が並びます。タレビンのアートには、アーティストは「小豆島町民」とクレジットに書いてあります。「プラス山崎亮」と小さく書いてありますが、小豆島の人達で作ったアートとなっています。

あの壁を作っている間に

彼らのコミュニティ自体を作りたかったということです。

旧醤油組合のところの壁では、皆記念写真を撮りたがります。他の壁には小豆島中の醤油にまつわるようなグッズだったり、小豆島で売られている全ての醤油、256種類あったんですが、これを町民の人達が集めてきて展示をしたりしました。醤油のタレビンは8万個使われたので在庫がかなりなくなりました。だから社長も結構いい笑顔になりました。

結局僕達作りたかったのは醤油の壁ではないということです。あの壁を作っている間に彼らのコミュニティ自体を作りたかったということです。

醤油のタレ壁の前で、皆がどんなカフェをするのかを話し合っています。もともと一緒に何かするという仲間ではなかった人達もこの中にいっぱいいるんです。醤油のタレ壁を8万個で作っていく間に徐々に結束力が高まっていて、この後ここでカフェをやって、ここで利益が出たら街づくりのための資金にしていこうという話をしています。だから僕達作りたかった本当の意味での作品はこの街づくりの主体です。このコミュニティを作るということが大事で、会期が終わればあのタレ壁は捨ててしまってもいいかもしれません。僕達が残したかったのはこっちです。

「何かアートな作品を作ってくれ」と言われても僕達作りたいたいの人のつながりだし、「計画書を作ってくれ」と言われても僕達作りたいたいの人のつながりです。皆で話し合って計画書を作ってもいいし、公園を造ってもいいかもしれません。何かプロジェクトが起きたら必ず住民参加型で進めていって、その間に人と人のつながりが生まれてくるようにしていくことがコミュニティデザインの仕事かなと思っています。

事務局

どうもありがとうございました。

それではここからは、川上村のことに触れながら話を進めていきたいと思います。

山崎さんに川上村を知っていただくにあたって、どうすればいいか少し考えました。人がつながる仕組みを作ろうというテーマですし、今日は講演会をしながら色々な人にここに登場してもらえばいいのではないかと思います。

今年から川上村には「川上村地域おこし協力隊」というメンバーが来てくれて、村づくりを一緒に進めています。およそ半年ですが、彼らが色々な活動をしていてくれる中で、色々な人の声を集めてくれました。それらを紹介しながら、山崎さんにも川上村の紹介をして、協力隊の方から困っていること、もっとこうしたいと思うことを山崎さんにぶつけてもらいます。

そのあとは、会場の皆さんにも質問を聞いていきたいと思います。

では川上村地域おこし協力隊「かわかもん」のメンバー、よろしくお願いいたします。

地域おこし協力隊発表者

皆さんこんにちは。山崎さんこんにちは。地域おこし協力隊の村上航です。

今日は私達が半年の活動を通して感じた疑問や、ぶつかった課題を山崎さんの方に投げかけていきたいと思います。でもお昼のお弁当を半分しか食べられなかったくらい、今僕はむちゃくちゃ緊張しています。とちったりするかもしれませんが、どうか暖かい眼で見守ってください。

まず私達について自己紹介をさせていただきます。私達は、地域おこし協力隊としてこの村にやってきました。地域おこし協力隊とは、人口減少や高齢化が進む過疎の地域への対策として始まった国の事業です。補助金よりも「補助人」という言葉を掲げ、今まで



のようにお金で解決するのではなく、人を介して地域の課題に取り組むことを目的としています。ここ川上村では、ダム後の村づくりを掲げる村長の施策の1つとして今年の4月から始まりました。そして年齢も出身も違う6人のメンバーがこの村に集まります。僕以外は全員女性です。羨ましいと思ったそこのあなた、間違いです。詳しいことは言わないですが、間違いですとだけ言っておきます。ありがとうございます。

「かわかもん」という名前をつけました。

「地域おこし協力隊」という名前はどうしても覚えにくいんですね。「援助隊」とか「お助け隊」とか「救う会」なんて呼ばれたこともあります。なので僕達は自分自身に「かわかもん」という名前をつけました。由来は、色んな人に川上村に来てほしいな、川上においでよ、川上にカモン、それが短くなって「かわかもん」です。「かわかもん」のロゴマークをつくりました。村が誇る木を進んでいく車輪に見立て、森の緑と川の青をまとい、自転車ぐらいの速度でゆっくり前に進んでいこうという思いがこもっています。

私達の仕事について、「これが私達の仕事です」と簡単に説明できればいいのですが、地域の課題は色々です。そこで私達は「つなぐ」ということを全員の共通課題として、まずは行事に参加したり、話をしたり、この村を知るための活動を続けています。

ではここから私達が活動を通して耳にした声を紹介していきます。

地域を思う気持ちをどのように形にしていっていいのでしょうか。

特に子どもが関わる事例があれば教えてください。

村に来てすぐの6月、私達は中学校の生徒と出会える機会を得ました。きっかけは教育委員会からの依頼です。中学3年生の総合学習の時間にゲストティーチャーとして授業をしてほしいとのことでした。私達にとっては村の中学生と交流できる貴重な機会です。ここで育ち、生活している中学生は村をどんなふうに見ているのか、私達は興味を持ちました。そこで、この村に関することならなんでもいいから彼ら自身の好きな所や好きなモノをあげてもらい、それらをつなげたオリジナルのガイドマップと一緒に作成することにしました。

作成中に聞かれた声を紹介します。

- ・「川上村には私達の知らないことがまだまだあった」
- ・「都会に憧れていたけど、協力隊の皆さんの話を聞いて田舎もいいなと思った」
- ・「いいところがたくさんある、自慢できる村」
- ・「川上村を誰もが住みたい、帰ってきたいと思う村にしていきたい」

一緒にガイドマップを作成する中で、中学生が川上村を思う気持ちを目の当たりにしました。何気なくつぶやいた言葉かもしれませんが、地域のことを考えるのは大人だけではないんだ、そういうことに気づきました。

楽しい一方、「準備が大変」とか色々な声があると思いますが、これからも継続させていくにはどうすればいいのでしょうか。

それぞれの地方にそれぞれ色々なお祭りがあると思います。私達は今年の8月、ゆかたを着せてもらって盆踊り大会に参加しました。この盆踊り大会、前回開催されたのは40年ほど前になるそうです。住む人が少なくなったり、運営の担い手が年をとってしまったりして開催が難しかったようです。どうして今年開催されたのか。「かわかもん」の2人が住んでいる北和田という地区の区長さんから「あなた達が来たから来年は盆踊りを復活させたいと思っている」と言われ、「来年ですか？今年は何？」とつぶやいた言葉がきっかけとなりました。どんどん話が進み、北和田老人会主催、近隣地区協力のもと、今年開催することになりました。

勢い込んで会場レイアウトや備品リストを作った私達でしたが、区長さんのところに持っていくと既にほとんど準備は整っていました。そこで運営はこれまでのことをよく知っている地域の方に委ね、飾りつけをしたり、踊りの練習をしたり、出店をするなどして参加しました。

踊りの輪は最初は小さかったんです。それがどんどん時間が経つにつれて、ついには2重の輪になったりしました。私達はきゅうりの漬物の屋台を出店していたのですが、その屋台も終了の1時間前には完売していました。僕がこの村に来て半年間の中でこの夜が1番賑やかで楽しかったです。ちょうどこの日東京から僕の友達に来ていたんですが、その友達がお祭りの最中にボソッと「こういうのっていいな」とつぶやいていました。

盆踊りで耳にした声を紹介します。

- ・「楽しかった」
- ・「思った以上に人が来てよかった」
- ・「かわかもん」が踊れることにびっくり。楽しそうに踊っていて気持ちよかった」
- ・「店番してて踊れず残念」
- ・「もう少し人手がほしい」
- ・「炎天下での力仕事も多くて、インターンの男子大学生がいなければ大変だった」



使わなくなった施設を再利用しようとする取り組みの例 地域の外から来た人と地域の人が協働している取り組みの例を 教えてください。

このコミュニティデザイン講座は全3回、今日がその最終回です。2回目には「川上村を知る」というテーマのもと、「かわかもん」がバスツアーを企画、実施しました。村の人々が生業として育ててきた木に関わることを地域づくりの観点から実際に現地を見て聞いて知っていくことが目的です。普通だったら滝とか鍾乳洞などの観光地に行くと思います。けれどこのバスツアーでは普通は行かない場所、けれどこの村にとって大切な場所を参加者の皆さんと一緒に巡って考えてきました。

まずは、チゴロ淵と呼ばれる場所にある民有林です。この木は樹齢約250年だそうです。何世代も前から人が木を植え、育て、切っては繁殖させてきました。そんな森を前にした参加者の皆さんからはこんな声が出ました。

- ・「手入れがすごい」
- ・「教材や、お手本のような風景でした」
- ・「手入れされた山は心地よい」
- ・「木のサイクルで考えると違ったものに見える」
- ・「チョンマゲの人が植えたんだな」
- ・「小人になった気分です」
- ・「樽丸と日食の関係がわかり、吉野林業の奥深さを再確認」
- ・「時代に合わせた知恵に納得」

およそ300年前からここでは酒樽の原材料樽丸を作ってきました。今も村内で樽丸を作られている春増薫さんの仕事の様子を見学させていただきました。樽丸と密植の関係、そして吉野林業について工場の中でお話を聞かせていただきました。

参加者の皆さんからの声です。

- ・「杉の香りのするお酒、ぜひ1度飲んでみたくなりました」
- ・「とてもいい木の香りでむせかえるようでした」
- ・「あーいい木の香り。もっと杉の香りが多くの人に伝えられればいいのに」
- ・「弟子入りしたいと思います」

樽丸を知ることは川上の森を別の角度からとらえなおし、その産業に思いを馳せることでした。村の人々が育ててきた森、村の伝統的な仕事を知り、最後に訪れたのがここ「源流分校」です。人口減少によって川上東小学校は立派な校舎を残したまま廃校となってしまいました。しかし大阪工業大学と村役場との提携で5年間にわたり教室を少しずつ改修し、この夏ようやく作業を終えました。大学で建築やデザインを学ぶ学生と教員が中心となり、川上村らしいものはなんだろうと考案から作業までの全てをこなしました。今ここ

にあるものをこの村らしく活用していく新しい取り組みを見て、参加者の皆さんからはこんな声が出ました。

- ・「子どもが大興奮する木の力」
- ・「すごくいい香りのするこんな教室で勉強したいな」
- ・「このままにしておくのもったいない」
- ・「ハードは揃った。さて何をしようか」

また、夏休みに作業をしている学生の横で先生にも話を聞きました。

- ・「もっと村の人と交流をしたい、話をしたい」

ハードは揃ったという言葉、とても心に残りました。

ここまでが「かわかもん」の活動報告です。今お話しした3つの質問に対して山崎さんの方から回答していただきます。



山崎

子ども達の意見を大人の言葉に変えて

大人達に実行してもらおうような構図になっています。

岡山県の笠岡市で「こども振興計画」というのを作ったことがあるのでその話をしましょう。2008年にお手伝いしたものです。岡山県の笠岡市というところがあって、島が7つあるんです。1番小さい島だと小学校の全校生徒が13人です。7島合わせると人口は結構多くて2,500人ぐらいいます。1つ1つの島でいうと800人とか900人ぐらいしかいないところもあります。その島全部で「島のこども振興計画」というのがあるんです。「笠岡諸島振興計画」と書いてありますが、こういう計画を作りましょうということになりました。

それぞれの島で色々話を聞いていきました。振興計画というのは大人を対象に作るものなので親に聞いて回ったんです。漁師のおじさんや旅館のおばさんや商店の人など、色々な人に話を聞きました。僕達はコミュニティデザインをする時には最初にできるだけ多くの地域の人達と会って、話を聞いて回ります。その時にあまり他の地域ではないなと思ったのが島の人達のやる気のなさです。僕達の経験した中では全国で1番ぐらいでした。抜群にやる気がないんです。できない理由を挙げる能力が極めて高いんです。全国どこへ行っても中山間離島地域はそうだとされますが、この笠岡の諸島は結構なものでした。たぶん恵まれているんだと思います。瀬戸内だし、食べ物もあるし、危機感がとにかくない状態でした。お父さんもお母さんも誰に聞いてもやる気がないし、「そんなこと言われても私達は忙しい」と言われてしまいます。そんな人ばかりでした。でも今頑張っておかないと小学校に13人しかいないので子どもがいなくなりますし、将来的には人口が0人になってしまうという話をしても、なんとかなるだろうと思っているのか、自分も島を出ようと思っているのか、本当に皆きっちりやる気がありませんでした。42人の人にヒアリングをしたんですが、段々「大人達とはやりません」と言うようになってきました。結局子ども達と一緒に作ろうということになりました。

各島から計13人の中高生達と一緒に10年後の未来について話し合おうということになりました。中高生と書いていますが実際には小学校の高学年もちょっと入っていました。高校はないので本土の高校に行っている子が2人だけ来てくれました。

10年後というのは「笠岡諸島振興計画」という計画自体が10年計画なので、子ども達と一緒に10年計画をたてようと言って「子ども島づくり会議」というのを何回かしました。これは大人とやるのと同じようなことです。現場を見たりして、この島は今どんなことが課題でこれから10年どんなことをすればいいのかを考えます。ただ1番大きく違うのは、大人達にこれを10年やってほしいという要望みたいなものを作ろうと言ったんです。僕達は大人達と総合計画を作る時に、決まり文句として「要望、陳情型の意見はやめてください。提案型で、あなた達が何をするのかを言ってください」と言っています。役場にこうしてくれというのはダメで、皆さんが自分で動き出す提案型にしてくれるように言います。

でも子ども達には要望や陳情をしろと言いました。とにかく大人達にこんなことをやってくれというような要望や陳情をどんどんしてくれるように言いました。

それぞれの島で話し合って、島を超えて話し合いました。大人達は島同士で仲が悪いのでなかなか協働ができないんです。漁師ですから当然です。浜ごとにも仲が悪いし島ごとにも仲が悪いんです。「笠岡諸島振興計画」を作ろうと思って大人を皆集めても、島が違っていると皆話をしません。でも子ども達は全然大丈夫なんです。すぐに仲良くなります。だから皆で協力し合って大人達にやってほしいことを提案しようという話をしました。それでその子ども達が出したアイデアを大人に提案するというようなことにしたんです。

子ども達なりの発表の仕方にしました。演劇をやったりしながら最後に大人達に子どもの提案書を出しました。この人は島のNPOの大人の人なのですが、理事長がそれを受け取りました。今度は大人が振興計画を作らないといけないということになったんですが、大人の人達はとにかくやる気がないですから、子ども達を仕込んで「とにかく大人を脅そう」と言いました。「良質な脅しをしよう。子ども達は自分達で気づいていない大きな武器を持っている」ということを子ども達に伝えておきました。つまり川上村も近いと思うのですが、この島の子どもは中学校を卒業したら島の外の高校に行かなくてはいけないんです。中学3年生ぐらいから高校受験のために島の外に出て行ってしまいます。すると中学校から外に出ると、高校3年間と大学に行くなら大学の4年間、合計7年間、さらに働いて3年ぐらい、合計10年ぐらいは中学を卒業した後島の外に出る子どもばかりなんです。この10年間の計画を今大人達に提案したわけです。大人達に「10年間、私達が外に出ている間にこの提案を実現してください。もしあなた達がこれを実行してくれないのなら、盆と正月は毎年帰ってきてチェックします」と突きつけたんです。「大人達が動いていないようなら10年後私達は全員一致で島には戻りません」と脅したんです。そうすると大人達は「まあ脅しだとは思いますが、万が一本当に帰って来なかったらどうしよう」とザワつきました。戻って来なかったら島の人口は0人になるんです。最後にアイちゃんという子が渡したんですが、渡した後に「本当に私達戻ってこないんだから」と脅して去って行きました。去った後に大人達が急に「島未来会議」というものをやり始めたんです。皆でどうしようと話を始めました。

「子ども笠岡振興計画」には、提案した子ども達が載っていて、「10年後の私達へ」という手紙からスタートする冊子です。これを大人達に渡しています。子ども達が計画したのは、地域のは地域で買える商店が欲しいとか、色々あります。「子ども笠岡振興計画」というのはこういう子ども達の意見を大人の言葉に変えて大人達に実行してもらおうような構図になっています。

昔砂浜だったところがコンクリートで埋め立てられて、彼らが遊んでいたところがなくなってしまったので、そこをもう1度砂浜に戻してほしいという意見が「砂浜保全の推進」とか大人の言葉に変わるんです。「環境に配慮した整備の推進」や「里山づくりの推進」など、大人の言葉になって、これが大人の振興計画の中に入っていきます。それをやるよ

うに子ども達が大人を脅していきました。

大人達からの返事があって、「廃校活動のワークショップ」など急に始めました。廃校がいくつもあるのでそこをどう活用していくのか大人達が考え始めました。あと、全然使われていなかった公民館を宿泊できる施設に変えていくこともやり始めました。子ども達が脅したことも含めて、徐々に大人達が「これはいよいよ動かないとまずいかもしいないな」と思い始めたところがあります。

子ども達が「大人の皆様へ」と、自分達で提案して実行できるような仕組みをハガキで入れておきました。その後も「島力回復プロジェクト」などいくつか大人達が自分達で活動するための会議というものを始めました。僕達も呼ばれて、引き続き大人達が実行するためにはどうするか考えました。最初はいくら話をしても出てこなかったんですが、その人達が集まるようになりました。



やりたいことがいっぱい。「じゃあ、これをどこでやる？」

…廃園になった保育園を改修して新しく使うことになりました。

海士町のプロジェクトで、「海士人宿」というのをやり始めた住民の団体がいて、廃園になった保育園を改修することをしていましたが、これは使わなくなった施設を改修して新しく作ることです。今回の川上村の場合では、大阪工業大学の人達が来て設計などやってくれたりしましたが、海士町では僕達が設計などのお手伝いをしました。実際に施工したのは島の人達です。住民は 2,400 人ぐらいの島です。その中で廃園になった保育園を「海士人宿」という場所にして、その中でいろんなプログラムをやっています。

今回と少し違うかなと思ったのは、先に何をやるかを決めたところです。ソフトを先に決めました。こんなことをやりたい、あんなことをやりたいという意見がいっぱい出てきたので、そのためのチームを先に作って、「じゃあ、これをどこでやる？」となった時に、役場が空いている保育園があると紹介してくれました。やることのために皆で手分けして整備しました。だから「ハードはできた、次は何をする？」という順番とはちょっと違う順番ではあります。海士町ではイタリアンレストランや週末のバーや地元の若者がバンド演奏する場所など、やりたいことがいっぱいありました。年寄衆がそんなところに出てきて若者と一緒に色々話をすることでもできるようになってきました。これは手作りのリノベーションつまり改装です。

「産業文化祭で、お赤飯を売りに行かないか」と

集落支援員が持ちかけました。

海士町では 14 集落を 1 つずつ集落調査して行って、地域おこし協力隊と似たような制度で集落支援員という制度を使って、ここと同じく 6 人の支援員に海士町に来てもらいました。役場の若手の 30 人と一緒に研修をやって、集落支援員が活動を開始しました。集落を回りながら未来について話し合うことを進めています。前回この辺の話をしましたが、詳しい話をしていなかったなので、外の人達が入ってきて集落の人とどんなことをやっているかということをお話しようと思います。

例えば保々見という集落ですが、今年で集落支援員と一緒にやり始めて 3 年目です。人口は 57 人、27 世帯の集落です。高齢化率は 28% で割と低いです。まだ若手がいるということですが、若手がいると言ってもかなり高齢者ばかりです。海士町は産業文化祭というものをやっているんですが、保々見の集落は山の奥にあったのでそういうことに参加することはあまりなかったんです。その産業文化祭に保々見の集落で作っているお赤飯を売りに行かないかという話を集落支援員が持ちかけました。保々見ではお米も小豆も作ってい

るし、お塩も海で作っているの、お赤飯は自分達で作れる材料だけで全部できるからそれを売りに行こうという話になったんです。でも島の人達は「自分達で作ったものを他人にお金で販売するということはすごくやりにくい、だからひっそりやりたい」ということでした。産業文化祭の会場の1番端っこの1番目立たないところで日常的な感じでおすそ分けのように販売したいということで、こたつを持って行って日常的な感じでお赤飯を販売しました。お赤飯はすぐ売れたのでお母さん達もすごく喜んでいました。日常にお母さん達がここへ来て普段のお茶飲み話をしていて、その横にお赤飯が並んでいるだけです。関係なくお母さん達は話しているところにお客さんが来て、「これって売り物ですか？」と聞かれたら「いいですよ」という感じで分けてあげるように販売していました。

**お父さん達は「これをやったらいい」「あれをやったらいい」と
言いますが、実際に動くのはお母さん達なんです。**

海岸に出て行くと仕事を終えた漁師のおじさんや農家のおじさんなど男の人達が夕涼みしているんです。だから集落支援の人達がヒアリングをしに行くのは大体海岸沿いに行くんです。先ほど盆踊りを続けていく難しさもあるという話をしていましたが、地域で盆踊りを復活させる時に1番働かなくてはいけなくなるのは奥さん達です。どこの地域に行っても言われます。川上村がそうだというわけではないですが男の人は口ばかりだと言われます。お父さん達は「これをやったらいい」「あれをやったらいい」と言いますが、実際に動くのはお母さん達なんです。そんな話を海岸沿いでお父さん達に言ってたんです。そうしたら「男だって口だけじゃない」という話になってきたんです。「本当に口だけじゃないですね」と言うと「やる時は俺達もやる」と言うので、それならまずそれを示さないといけないということになり、地域のお父さん達が地区の区民をおもてなしするという大交流会をやるという話になりました。男の料理でお母さん達をもてなすということで、お母さん達は料理を作らないでお父さん達で料理を作るということになり、大交流会をやって区民をおもてなししました。でもお父さん達で作ったのでおにぎりも全然三角ではなかったです。



ソトから入ってきた人達は、ウチの人達皆が関わるのりしろを残しておくというのも大事なかなと思いました。

老人会の人達にもヒアリングをしました。老人会の人達は年中行事がどんどん減っていくことが不安だと言っていました。それで保々見にあった年中行事を何月に何があるか聞いていきました。季節ごとにすることを代々受け継いでいきたいということでした。聞いていくと色んな時にこの集落は手ぬぐいを使うことがわかったので、手ぬぐいを年中行事で飾っていったらいいのではないかということになり、それでオリジナル手ぬぐいを作ることになりました。年中行事を残すための手ぬぐいをどう作っていけばいいかというような話し合いをして、結局消しゴムハンコでそれを作ろうということになりました。こういう昔の写真などでどんなことをやっていたのか皆で見て、それをイラストにする人達がいる、イラストにしたものを消しゴムを買ってきて彫刻刀で削ります。結構簡単に削れるんです。大きいものを作ってちょっと縮小すると見栄えがまあまあになります。消しゴムハンコで地域の人達が作ったものをイラストにして、それで手ぬぐいを作りました。真ん中に保々見という文字が入るようにしました。手ぬぐいのお披露目をやったりして、保々見の人達に手ぬぐいを配りました。このへんは新聞にも載りました。

そうしてたら「キンニャモニャ祭り」という町の中で1番大きな祭りに保々見の人達が出ようということになりました。実は保々見は長い間お祭りには参加していなかったんです。人数も少ないですし、踊れる人もどんどん少なくなってきてたので10何年出てなかったんですが、今回参加してみようということになりました。ただ参加する人数が少ないのは確かなんです。それで踊れる人が少ないなら人形を作ろうという話になって人形を作ったんです。集落支援員が、皆で踊ると踊っているように見える人形を竹でささっと作りました。これは全然カッコよくなくて汚いんですが、そういう手があるということになりました。でもこれはいかにも汚いので集落の人が皆でもう少しちゃんとしたものを作ろうということになってきました。最初は10人だけ参加しようと言ってたんですが、作っている間にクチコミでどんどん広がって結局参加してくれた人は38人に増えました。うち4人は人形なので34人が「キンニャモニャ祭り」に参加することになりました。

今の集落支援員の役割のように、よそ者が地域に入ってきた時、例えば人形を作る時に完璧なものを作らないとか、そういうことが結構大事だと思うんです。外から来た人達はデザインやパワーポイントがきちり作れたりするので自分で全部やってしまいます。そうすると集落の人達自身が頼ってしまいます。汚い試作品を作ることが大事です。すぐ作ります。人形があった方がいいと言われれば人形っぽい汚いものを作っておきます。試してみても、これはよさそうだと思ったら「このままいくんですか？」という感じになります。「これはちょっと汚いだろう」ということになれば「じゃあ、ちょっとキレイにしていましょ」と皆が関わるのりしろを残しておくというのも外から入ってきた人達と内の人達がやるという意味では大事になってくるのかなと思いました。

僕達が直接やっているのではなくて、 集落支援員が活動をしてきているという状態です。

多井という地区で集落支援員がやっているのは「ふるさとからの手紙」というものです。多井は高齢化率が65%の集落で人口が22人なので結構高齢化が進んでいる場所なんです。

空家がどんどん増えていって最後はここしか人が住んでいないという状態の集落になる話なんですけど、ここで出郷者、地域を出た人達に手紙を書いていきましょうということを始めました。おじいちゃん、おばあちゃん達が手紙を出していこうということで、「夏の交流会のお知らせ」も含めて出郷者の人達に手紙を送りました。お盆の時だったので帰ってくる人もいだろうということで、島から出て行った人達に手紙を送ることになりました。手紙を送るのも一緒なんですけど、集落の人達がそれを作れるようにならなくてはいけません。なので、デジタルカメラやプリンターの使い方の勉強会をやって、自分達で写真を撮るようにしてもらいました。写真を撮るのは多井地区でどんな人がどんなことをやっているのか写真で伝えてもらいたいと、東京や横浜に出て行った人から要望があったからです。じゃあ写真を撮りましょうということで区長さん達と一緒に写真講座をやりました。文章はワープロでやって、写真もやって、装飾は手作りでやって、切り貼りで一緒に作っていくということをやりました。自分達で手紙を書いていくということで、皆で一言メッセージみたいなものを載せて「多井からの手紙」というものを作って、全国の出郷者の人達に送っています。皆の一言メッセージは手書きでやっているみたいです。区長さんもかなり熱くて、「多井が大好き、多井の海が好き、多井の人が好き」とずーっと書いています。かなり町を愛している人達です。

手紙には返信用のものを付けていて、受け取った人から返信してもらうようにしていました。それで100%の人が「嬉しい」と答えてくれて嬉しかったのですが、1号の時より2号の時には、「すごく嬉しい」と言ってくれるようになってきました。返信が絵手紙みたいになっていたり、かなり長いお礼の手紙が送られるようになってきました。確かに今は多井地区には住んでいないのですが、いつか自分達の集落にまた戻れる日が来ることを考えてくれている人達がいるということです。

そういうことが海士町で集落支援員を鍛えた後に起きてきているプロジェクトです。

先ほどお話した通り、僕達はこれを直接やっているのではなくて、集落支援員を6人雇ってもらって、その人達にどういことをやっていけばいいのかという話をしているって、彼らがこの活動をしてきているという状態です。



若い人でやってみたいと思っている人がいるなら、

ちょっと棚を寄せて、新しい仕事を試させてあげてみては、

空き施設ではないんですが空き施設になりそうになっているものです。ただ人口が62,000人もいるんです。だから川上村でその話をしてもどうするんだと思われてしまいそうですが、お話しします。

香川県の観音寺というところでやっている「まちなか再生計画」の話です。観音寺の概要は、人口が62,680人です。それぐらいになるとシャッター街があります。商店街は大体こういうシャッター街になっていて、開いている店舗は大分少ないです。商店街組合の人達が役場に相談に行ったんです。「商店街をなんとか元気にしたい。自分達で何年もイベントをやったりしているが、なかなか人が来てくれないし売上が上がらない」と相談したら、観音寺の市役所の人が「大阪あたりにそういうことをやっている坊主にひげ面の山崎というヤツがいるから1度呼んでみてはどうか」と言ったので、僕達はここにに関わることになりました。行ってみると商店街は50~60代のおじさん達でした。そのおじさん達に商店街の現状を聞きました。昔は肩があたるぐらい人がいっぱい歩いていたらしいのですが、いつの間にか猫しか歩かない商店街になってしまって、今は猫すら歩かないと言っていました。僕達が商店街を見に行きたいので面白いところはないか聞くと、おじさん達はものすごく自信たっぷりに「面白いところはない。面白いところがあればこんな状況になっていない」と言っていました。面白いところがなくても見ておきたいということで案内してもらいました。紹介してもらっている間、おじさん達にとってはどこにも面白いところがないという確認作業でした。でも僕達は面白いと思ったところがありました。シャッターが閉まる少し前の症状だと思うのですが、1つの店の中に別の店が入っているという状態が生まれているんです。これは結構面白いと思いました。

全体としては下着屋さんなんですが、下着屋さんの中に一部ケーキ屋が入っているんです。こういうことは大阪や神戸の商店街ではなかなか起きていないんです。店の中に店があるのは面白いと思いました。どうしてそういうことになっているのか下着屋さんに聞いてみたら、お父さんとお母さんが下着屋さんをやっていたんですが、息子がパティシエになってしまったらしいんです。息子がケーキ屋を開きたいとなったんですが、別店舗ですと設備投資などでリスクが高いため、それならうちの店の中にケーキ屋を作ればいいということで棚を寄せて息子のケーキ屋を入れたらしいです。

この組み合わせってすごくないですか？僕は見た時に震えました。女性にとったら下着屋とケーキ屋って夢の組み合わせじゃないですか。まず下着を買いに行って気に入った下着を買って、甘いものが食べたくなくてケーキを買って帰る、ケーキを食べると太って下着のサイズが合わなくなる、もう1度下着を買いに行く、そうするとケーキが食べたくなくなる、これってマッチポンプです。親子でうまくやったなと思います。ケーキ屋と下着屋を

ひっつけるというアイデアが誰かがアドバイスしたわけじゃなく自然にできているんです。

他にもこんなお店がいっぱいあるんです。花屋で雑貨屋なんですけどカフェが入っているとか、着物屋なんですけどパンも売っているとか、クリーニング屋なんですけど中に餃子屋が入っているとか、そういう店がいっぱいあるんです。

クリーニング屋の名前はカタカナで「ダイエー」で、餃子屋の方は漢字の「大栄」です。こういうふうに皆に話をする時に名前がクリーニング屋がカタカナで餃子屋が漢字だと言ってもなかなか伝わらなかったんで、奥さんに電話して、「看板を写真で拡大して撮って、メールで送っていただけますか」と頼んだら、「わかりました。送ります。でも1週間待ってください」と言われました。なぜ1週間もかかるのかと思ってましたが、1週間後に届いた写真を見ると奥さんが美容室に行ってキレイにして餃子を手に持って一緒に映っていました。

現在の商店街は戦後にできたところが多いです。高度経済成長期に大きくなったんですが、2000年になってイオンやジャスコができたり、ネットで皆が買い物するようになってきたら、お得意様が買うものしか並べないようになりました。地方の商店街に行くときスカスカだなと思う時があります。そういう状態になっている時に例えば息子がパティシエになって帰ってきたりすると、お父さんとしては、棚を寄せて息子の新しい業態を入れます。

それなら別に息子でなくてもいいじゃないかということです。若い人でお店をちょっとやってみたいと思っている人がいるなら、ちょっと棚を寄せてやって、そこで新しい仕事を試させてやってくれということです。観音寺の商店街はどの店も店の中に店があるという状態にしていったらちょっと珍しい商店街になるんじゃないかというような話をしました。そうしたら50代、60代、70代の店主の人達は「まあいい。うちも店を寄せるだけならできるかもしれない。それならやってみよう」ということになりました。



地域の人たちが、自分たちでアイデアや労力、
時にはお金も出し合って、楽しいと思うことをやっている。

2年目のワークショップのテーマは明快ですが、50代、60代、70代のおじさん達がどうすればそんなピチピチの若手と知り合うことができるのか、そこが問題です。それで去年、皆でワークショップや話し合いで議論しました。結論から言うと何のアイデアも出てこなかったです。要はおじさん達はどう頑張っても若い人達とは出会えないということです。これが結論です。でもワークショップの会場で皆で話をしてもおじさん達はワークショップの本会の途中でも後の飲み会のことになってソワソワしているんです。ひどい人になるとワークショップの現場で「まあ本番はこの後だから」とか言ってるわけです。だから飲み会を禁止にしました。おじさん達50人ぐらい集まってくれているんですが、若い人と知り合いたいなら焼酎のお湯割りやタバコがモクモクしている居酒屋とかに行っているのはダメだと言ったんです。そうしたら僕の父親ぐらいの世代の人達が結構素直に聞いてくれました。終わってから誘い合わないよう、僕はワークショップが終わったら出口のところで待ち構えて「ありがとうございました」と皆に挨拶して、「誘い合っちゃダメですよ」と言って全員1人ずつ帰しました。でも皆飲みたいんです。でも誘うのはダメなので1人で飲みに行くんです。ある参加者が近くの居酒屋で飲んでるんですが、ちょっと未練があるのか自分が飲んでいるところをスマートフォンで写真を撮って「今宵も始まりました」とフェイスブックにアップしたんです。そうすると他の参加者も実は飲みたかったみたいで1人ずつ居酒屋に行っていたんです。そして皆が、「今宵も始まりました」という掛け声でフェイスブックにアップするようになってきたんです。そのうちそこで皆が会話し始めるようになりました。別々に飲んでいるんですが、皆で「カンパイ」とか「今日はどこで飲んでるんですか？」なんていう会話をしだしたんです。会話をしながら1人飲みをしているという状態が生まれてきました。結局「今宵も始まりました」というフェイスブックのページを作ってしまうと、グループができています。「今宵も始まりました」というグループに入っている人達はとにかく毎晩のように飲んでいます。日本中でこのように話をしているの、そのときにも会場で調べる人がいるんですね。香川県の観音寺市でやっていることに、高知県の大月町の人に参加し始めたり、札幌の人が参加したりしているんです。次に「今宵TV」というテレビ番組を始めました。全然必要ないと思いますが、「観音寺発！世界初！」と書いてあります。インターネットのユーストリームというのをを使って、自分たちで番組を流しています。テレビに映っているのが楽しいんでしょうね。観音寺の人たちは、これを見ないですね。見るよりそこへ行ったほうが早いですから。すると、どんどんどんどん、会場に人が集まってきます。この番組は見ている人より、出ている人のほうが圧倒的に多いという番組です。するとなんと、若い人が集まるようになったんですよ。どう考えても若い人とは出会う機会がないと言っていたおっちゃんたちが若い人と出会い、若い人の中には「雑貨屋やりたい」とか「カフェやりたい」とかいうことが出て

きて、今はどの組み合わせにするかを話し合っている途中です。ワークショップの場では、アイデアも出てこなかったんですが、今このような段階を経て、ショップインショップができそうになっているんですね。そして観音寺のお店の中で、あなたもお店をはじめませんか」というチラシをいよいよ配り始めました。

これは、空いている施設を活用する例とは少し違いますが、空きそうになっている施設を、すこし中のものを寄せて、新しい活用を試みるという例ですね。いずれにしても地域の人たちが、自分たちでアイデアや労力、時にはお金なども出し合って、自分たちの楽しいと思うことをやっているということだと思いますね。

地域おこし協力隊発表者

山崎さん、ありがとうございました。

今伺ったアイデアは、どれも素晴らしいものだったと思いました。会場にいると「自分達でもできるんじゃないか」と、そういうふうに思っていると思うんです。ただ、この会場を出た瞬間に現状を思い出すんです。実際この中でも動いている方はいっぱいいらっしゃると思うんです。でも、段々会議の参加者が減っていきなりするんです。僕達も子ども達と一緒に活動しましたが、なかなか皆恥ずかしがって意見を言わなかったりします。

実際に活動しているうえで疑問に思っていること、どうにかしたいこと、皆さんたくさん持ってらっしゃると思います。ぜひ次の質疑応答の時間で尋ねてください。

皆さんありがとうございました。



事務局

「かわかもん」の皆さん、ありがとうございました。準備も大変だったと思います。お疲れ様でした。山崎さんには、柔軟に回答いただきましてありがとうございました。

では、会場の皆さんからも少しお話を聞いてみたいと思います。まず川上村の中で取り組んでいる方で、「今こんなことをしているんですが、こんな時はどうしたらいいですか？」とか「こんなことがあったんですがどう思いますか？」など、ぜひお話をいただきたいです。いかがでしょうか。

ちびっこ増やし隊

子どもの数を増やすには色々な答えがあると思いますが、
まず何からすればいいのか？



こんにちは。「ちびっこ増やし隊」という活動させてもらっています。特に子どもが減ってきているので、子どものお母さんが中心になって月に1回ぐらいのペースで「自分達で何ができるのか」というようなことなど話し合っています。最初は村に対してこういうことをしてほしいという要望が中心でした。月に1回ぐらい集まって、お菓子を食べながら話をするというような形で活動をしてきています。始まったのはちょうど1年前ぐらいです。自分自身は楽しく活動できているしいいかなと思っているんですが、今考えているのはもう少し幅広くできないかなということです。今は決まった人が集まっているのですが、ちょっとずつでも世代などを広げられればと思っています。子育て世代のお父さんお母さん達だけではなく、色々な人達にももう少し幅を広げていきたいと思っていますが、なかなかそこまでいっていないような感じです。よければ隊長からも話を聞いてください。

山崎さんこんにちは。聞きたいことが多すぎて何から聞けばいいのかわからない状況です。私は去年子どもを産んで今は1歳になったんですが、この子の同級生は他に1人だけなので学年で2人なんです。子どもの数がどんどん減ってきているのは明らかなんですが、データ上で見るとこの先もおそらく減り続けていくだろうという感じです。「何とかしないといけない、子どもを増やさないといけない」と皆で話をするんですが、今度の4月とその次に小学校に入る予定の子どもは1人だけなので、なんとか同級生を増やしたいんです。

私達自身は早くしないといけないという焦りがすごくありますが、そんなにすぐに結果は出ないだろうという気持ちもあります。いつも「早くしないと!」「でもそんなにすぐに結果は出ないだろう」ということの繰り返しです。最初は皆で楽しく活動しようという感じで集まっているのに、焦りが出てくると段々提案型から要望型に変わって行って、役場がなんとかしてほしいという気持ちになってきます。でもこうやって話をするともた原点に戻って皆で楽しく活動しようとなるんですが、結局煮詰まってきて、役場がなんとかすればいいのにといい気持ちになっていきます。いつもそのジレンマがあります。いつも「早



く答えは出したい」でも要望ではなく楽しみながらやりたい」「結果どうすればいいんだ」という堂々巡りです。テンションが上がったり下がったりします。でも皆の考えていることは一緒なので、なんとか仲間で集まってやっています。

具体的に子どもの数を増やすには色々な答えがあると思いますが、まず何からすればいいのか、もう1度原点に立ち返って教えてもらえたらなと思います。

山崎

自分達の地域に、どういう魅力があるのかをちゃんと外に発信していかななくてはなりません。

とにかくイターンを増やすということでしょうね。地域に入ってくる若い人達を増やすことだと思います。外から入ってくる人達をどういうふうを増やしていくのか、特に若い世代をどういうふうを増やしていくのかということは重要になってくるのではないかと思います。先ほどお話しした海士町ということところは人口が2,300人と言いました。廃園になった保育園があって、そこを海士人宿に変えたと言いました。なぜ保育園が廃園になったかと言うと、新しい保育園を建てたからなんです。今海士町は子どもの数がものすごく増えているんです。保育園が足りなくなって新しい保育園を建てるということになっています。町営住宅も足りません。空家はほとんどないです。厳密に言うと空家はあるんですが、貸してもらえない空家がありません。だから今は町営住宅を一生懸命建てています。

それは海士町の中でも商品開発研究生という仕組みを作って、東京や大阪から来てもらっているからです。外の目線から見て「これはいいな」と思うものを商品化していってくれる人を1年だけですが給料を出して雇っています。ちなみにその給料は町長らの給料をカットして出していたりします。町長は7割カットで課長級は3割カットです。103億円の

借金があったというのもあるんですが、町長が自分だけ7割カットすると言ったら島の後輩にあたる課長級の人達が自分達もカットするということになりました。それで集めたお金で若い人達を呼びました。年間200~250万円かもしれませんが、1人ずつ雇おうということになりました。毎年そういう人達が来れるような仕組みを作っていたら、総務省が「地域おこし協力隊」という名前のもや集落支援員という制度を作ってくれました。海士町はその制度ができる3年前から先にやっていたんですが、今はそんな制度を使いながら、ここにも来られているような若い人達にも来てもらうことにしています。そういう人達が地域で結婚して子どもを産んだり、子どもを持っている世帯の人が仕事があるからIターンで入ってきたりしています。釣りが好きで仕方がない人が奥さんと子ども2人連れて入ってきたりしていますので、今は子どもがどんどん増えていっている状態です。多い年だと年間に100人のIターンがありました。2,300人の街で100人です。川上村で言うと60人ぐらいが1年間に入ってきたような感じです。平均すると川上村で言えば30人ぐらい外から若い人が入ってきます。

そのためには自分達の地域がどういう魅力があるのかというのをちゃんと外に発信していかなくてはなりません。それと自分達の街でどういう暮らしができるのか、仕事も含めてきっちりと提案していくということが必要になってくると思います。それプラス、もし子どもを連れてきた場合は、子ども達も一緒に楽しいことができる活動があると、皆さんの活動をPRしておくことだろうと思います。

役場もそうなんですが、他の市民活動団体と皆で連携しながら川上村のよさをちゃんと伝えていくということが大事だと思うんです。子どもの活動をしている人達と林業の活動をしている人達は別ではないし、食の活動をしている人も別ではないんです。オール川上村で、「あんなこともこんなこともあるし、仕事もある」という状態をちゃんと全員が本気で伝えていくことができるかどうかです。

そこで重要な役割を果たすのはもちろん役場ではあるんですが、役場だけでやってもアイデアは尽きてしまいますし、なかなか人的な資源もありません。住民の方々の目線でちゃんと伝えていくというのが大事かなと思います。

海士町は全員営業マンみたいな感じです。何でもいいんです。フェイスブックでもいいし、ツイッターでもいいし、ブログでもいいんで、とにかく都市部で暮らしていて田舎暮らしをしたいと思っている人の検索キーワードに引っかかるようなものを毎日のように出すんです。子育てで一生懸命になっているお父さんお母さんだけではなく、林業の人も食の人も別の人も皆が川上村を売っていくんです。そうすると、林業のこともあるし、子どものこともあるし、という複合的な問題を少しずつ解決できることになってきます。個人的な情報発信は役場がやりにくいところなんです。役場だといわゆるパンフレットになってしまいます。そうするとオシャレじゃないし、若い人にはなかなか訴求しない行政っぽいものになります。でもそれを役場に求めても仕方がない気がします。クスッと笑えとか、オシャレとか、カッコいいとか、そういうのは民間からどんどん発信していったらいい

いし、役場が出すべき情報はもう少し落ち着いた感じで出していくというのがいいのかなと思います。

海士町の町長がずっと言っているのは、イターンで入ってきた人達に「あなたたちはここで骨を埋めるんでしょ」という言葉だけは言っはいけないと言っています。それはその人達の居心地を悪くするので、言うと町長に怒られます。「何年ぐらいここにいてくれる？」と言うと「それを言ったらおしまいよ」と町長に怒られます。「1年で去ってくれてもいいが、去る時には海士町で育ててもらったことやよかったことをどんでん外で言ってくれ」と言っています。構図は同じです。海士町から出て行った人はいっぱいいます。入ってくる人もいっぱいいます。とにかく入る人をいっぱいにして、一部残ってもいいですが、大半は出ていって全国で活躍する人になってくれということです。活躍する人が何度も海士町と連呼すると皆気になるんです。僕達も海士町後方部隊のようになっています。僕達の仕事の中で海士町は5年間お付き合いをしましたが、海士町は画期的にすごかったです。だから島根県の離島の海士町のことは色んなところで語ってしまいます。

だから「長くいてほしい」という地域の希望みたいなものがイターン者や移住者にとってはすごく重いので、それはなるべく外してあげるんです。いつ去ってもいいですよという状態を村が作れるかどうかです。そうすると案外いてくれるんです。「ずっといてくれるんでしょ」と言われると居心地が悪くなって逃げたくなるんですが「いつでも抜けていいよ」という雰囲気村全体にあれば、「なぜ？私はいますよ」という感じになっていきます。その雰囲気作りは大事だと思います。

ちびっこ増やし隊

またすごくテンションが上がってきました。ありがとうございました。

村づくり塾

色々な所で、色々な活動がバラバラに行われているんです。

まとまって1つになる方向に持っていくには？



「村づくり塾」という活動をさせていただいています。前回のお話などの中で、スタジオLさんに頼めば1番早いなという印象を受けました。我々がやる場合、色々な所で色々な活動がバラバラに行われているんです。これがまとまって1つになるという方向に持っていければ、もう少し速度も上がってくると思うんです。そういう組織作りのアドバイスをお伺いしたいです。

それが1つと、あとは何か惹きつけるコツやきっかけについてお伺いしたいです。まだまだ「何とかしないとイケない」という思いに全員なっていないと思うんです。それをなんとか惹きつけるコツというかポイントを伺いたいです。

山崎

各団体ができることを持ち寄って村のプロジェクトをつくりながらお互いを知る機会とするのがいいと思います。

その2点はきっと似ています。複数活動されている団体がアライアンスというか同盟を作って何か一緒にやっ払いこうと思った時、人口が1,500人ぐらいのまちだとなかなか難しいのは「どっちが偉いんだ」ということが出てくることです。「下に自分達が入るのか」というような話が必ず出てきてしまうんです。「村づくり塾」さんが集めた時は、集まった人達は「私達は「村づくり塾」さんの上なの？下なの？」となりますし、誰かから「村づくり塾」さんが誘われた時は「「村づくり塾」はそこに参加する側なの？」みたいな感じにもなります。だからつながるのはいいんですが、何かの組織を作っていきましようという事でスタートするとつながりにくくなる場合が多いです。

そうではなく、特定のプロジェクトを立ち上げて、プロジェクトのために手伝ってほしい人を集めるというのであれば、役割があるのでそれぞれの人達は役割をやりに来ます。何回かそれをやっているとお互いに気心が知れて一緒に問題意識を共有することができるかもしれません。それがイベントであってもいいと思うんですが、イベント以外で少し違う形でやってみてもいいと思います。「空き店舗でこんな商売をしてみましよう」と言った時に、複数のチームで「こんな材料だったら供給できる」とか「売り子に立つなら私達ができる」とか、できるところを持ち寄って一緒にやっ払いれば、その間に色々気心が知れてきて、問題意識を共有することができるようになるかもしれません。すごく簡単なことでいいと思うんです。

先ほど中学生達と村の川上村の中学生とガイドマップを作るということをやっ払いましたが、あれぐらいのプロジェクトをいくつかの団体と一緒に大人バージョンでやっ払いみるというのもいいかもしれません。そうすれば写真を撮るのがうまい人達が入っているチームが参加してくれて、文章が書ける人が入ってくれて、案内できる人が入ってくれて、そのプロジェクトを1ヶ月に1回ぐらい、半年間ぐらい集まりながらやるだけでも何か共有できるものがあるかもしれません。そういうプロジェクトを複数立ち上げながら、いくつも一緒に活動していると、先ほどの問題意識が共有できるかもしれません。それぞれのテーマ型のコミュニティが持っている問題意識はちょっとずつ違います。先ほどのように子どもの数が少ないということに特化しているチームもありますし、やっぱり林業だろうと思っている人もいますし、歴史のことを考えている人もいるかもしれません。それらがち

よって違うプロジェクトのところに集まってきたら「そこも問題なのか」と気づいて共有できるかもしれません。同じチームが別のプロジェクトに参加している場合もるので、「この前ガイドマップのプロジェクトで聞いたのだが、子どもがこういう状態らしい」という話をこっちにも持っていくことができるかもしれません。だから川上村にいるそれぞれのチームが運営協議会みたいになっていくというのは無理にやるとなかなか難しいです。そのために会合に出ているという気もするでしょう。むしろ「こういうことをやりたい」という特定のことがあって、「すみませんが手伝ってくれませんか。あなたが何かやる時は私達を手伝いに行きますから」ということの方がいいと思います。できることを持ち寄った村のプロジェクトをいくつか作っていくというやり方の中で、各団体がお互いを知る機会を作るのがいいと思います。

先ほどの小豆島の醤油の壁はほとんどそれなんです。あんなのは本当は作る必要はなかったんです。全然違う立場の人達が一緒に半年間ぐらい本当にチュウチュウやり続けていたら暇だから本当に色んな話をするようになりました。そうすると気心が知れてきて、結果的に会を作りましたが、会は別に作らなくてもよかったんです。それぞれの団体がやっていることがつながるきっかけができればいいと思ってたんですが、彼らは一応会を作ってプロジェクト化しました。醤油カフェをやるプロジェクトでしたが、青年団の中には料理ができる人がいないので他のチームで探しました。あとお金の計算ができる人や内装をキレイにできる人やイベントの企画ができる人など、そういう人達が全然違う活動団体の中から出てきて、あのチームを作っているという状態になりました。

だから仕組化するより先にプロジェクト化してしまうんです。やることを先に決めて、「これをやるためにあなたの力がないと無理なんです」とお願いして来てもらいながら、「次にあなたに言われた時は私達にできることは何でもやりますから」という関係性をそれぞれの団体が作ることができたらつながりが生まれ始めるんじゃないかと思います。



事務局

今日は村外からも地域づくりなどに関わられる方がいらっしやっているとしますので、質問をお聞きして、山崎さんにコメントをいただきます。

質問

人とモノなどの関わりに気づけるようになるために
普段どんなことをすればよいですか？



ありがとうございます。私は大阪の阪南大学の国際観光学部の事務職員で係長をやっております。フェイスブックで山崎さんのフォローをしているのですが、直接お話をお聞きすることができてすごく楽しかったです。先ほどの大阪工業大学さんがセミナーハウスを作られたりした話はすごく興味があって、私どもの大学の方でも何か関わりができればなというふうに思いましたので、このよ

うな会合をすることが非常にいいのだと思いました。

山崎さんにお聞きしたいのは、先ほど店の中に店を作ればいいのか、島の中で要らないものを使ったりすればいいのか、山崎さん自身がそういうことに気づかれています、気づくために何か普段やっていることなどがあればお聞きしたいです。人のお話を聞いて人とモノなどの関わりに気づけるとすごくいいのだなと思いました。私もそういうふうになりたいと思ったのですが、そういうふうになるために普段こういうことをやってあげばいいようなことがありましたら教えていただけませんか。

山崎

世の中の事例をたくさん知って、
それを組み合わせていくことが大切かなと思います。

アイデアはどういうふうになれば出てくるのかというお話ですが、とにかく事例を知ることを行います。前例主義とか事例主義とか言われていますが、後ろに主義とついてしまうと何か悪いことのように聞こえる時代がここ30年ぐらい続いたような気がします。でもやはり事例というのは大事だなと思っています。我々デザインをやる人間は実は大体

事例主義なんです。事例とは違うことをしたい、はじけたいと思っている人がいっぱいいるように見えて、ほとんどが頭の中に 100 も 1000 も事例をたくさん入れている人の集団です。だからデザイナーのような発想力が欲しいと思えば、とにかく同種の事例をたくさん勉強することだと思います。デザイナーは何もないところからパッと思いついてこんな形を作りましたと言っているように見えますが、似たようなものをいっぱい調べてスタディと言われるものを何度も何度も描いているんです。そうでなければデザイン事務所の本棚に世界中のデザイナーの作品集が並んでいる必要はないんです。なにかを生み出す能力が本当にあるならいらぬんです。でもほとんどのデザイナーは世界中の建築家やプロダクトデザイナーやグラフィックデザイナーがどんな仕事をしているか、日がな見ているんです。同じことはやりたくないんですが、よくよく見ると「あの人がやったあのパーツとこのパーツとあれが入っているな」みたいなことがあります。デザインに詳しい人達はどのデザインを見てもわかります。実はデザインの歴史はずっとそれできているんです。「Re: デザインの歴史」と言う人もいます。デザインしなおしてずっときているというのがあって、1890 年ぐらいから 100 年間ぐらいのデザインの歴史を見ていると、「これはバクッたな」というのがいっぱいあります。だけどパッと見るとなんだかすごいものをデザインしたように見えちゃうんです。

実は僕達は無意識も含めて、どこかでやっていたこととどこかでやっていたことをバクッたネタがわからないぐらいごちゃまぜにして出しているということだと思います。こういうアイデアを出していこうと思った時には日本中、あるいは世界中でどんなことをやっているのか知って、それを自分達のプロジェクトに生かしていくのがいいと思います。

うちのスタッフによく言うのは、1 つプロジェクトを担当したらそのプロジェクトに関係していそうな事例をインターネットで 100 個調べなさいということです。うちには事例シートというのがあって、事例のタイトルと運営組織と開始年月と経緯と現在の課題を A 4 のシートにまとめています。ネットで探してそれをまず 100 枚作るんです。100 枚作るとその中で 10 個ぐらいは「これはすごい」と思える感動的な事例が見つかります。そういう事例についてはネット以外の雑誌や本など、ちょっと信頼できるメディアにも出ているはずなので、それを取り寄せてさらに細かく読みなさいと言います。そうすると A 4 シート 1 枚だった事例シートの後ろに 3 枚ぐらいつくようになるんです。その 10 個の中にさらに深めたいと思う事例が 3 個ぐらい出てくるので、それは直接電話で予約をして現場に行っ て話を聞かせてもらったり、写真を撮ってきたりします。そうするとさらに事例シートの後ろに 5 枚ぐらいつきます。

そして、いよいよワークショップとして現場に入って住民と話をします。そうすると関連する事例が 100 ありますし、その中の 3 つはものすごく詳しいですから、出てきた意見をいくつか自分の頭の中で組み合わせて「あれとこれを組み合わせてこうすればいいのでは」というのが見えてくると思います。だから事例をよく知るということです。これが大事なんじゃないかなと思います。

事例そのままはダメです。「山が多いなら葉っぱを売ってビジネスをしましょう」とかダメです。そのままなので皆知っているようなプロジェクトになってしまいます。それでは全然オリジナリティがありません。でも例えば上勝町の取り組みと、その奥でやっている神山町の取り組み、その2つは全然違うものですから、それを混ぜるだけでも違います。上勝町の「くるくるステーション」の部分と「葉っぱビジネス」の部分と神山町の「アートインレジデンス」と「サテライトオフィス」の話はまた違います。この4つを混ぜるだけで全然違うプロジェクトが川上村に誕生するんです。それならこちら側からパクったなんて全然わからないようなプロジェクトになっている可能性があります。

質問

モチベーションの維持は、こういった形でされていますか？

奈良県庁のスポーツ振興課で仕事をさせていただいております。去年1年間相互派遣という形で川上村の役場の方でもお世話になっていましたので、おかげさまでこちらの方にもかなり縁が深くなっております。

長い間やっているモチベーションの維持ができないことがあります。口コミの力はすごく強いんですが、伝播していくのはかなり時間がかかります。そういうものだということは頭ではわかっているんですが、その間目に見える効果が少しずつでも上がっていかないと、正直ちょっとモチベーションの維持がしんどいと思うことがあります。プロジェクトをする側としてモチベーションの維持はこういった形でされているのか具体的にお聞きしたいです。



山崎

なんとなくですが、体育会系のサッカー部やラグビー部みたいになればいいなと思っています。

確かに小さな成功体験というのがなければやっていて面白くないので、それは極力準備するようにしていますし、本人達自身がそれを意識するようにもしています。

なんとなくですが体育会系のサッカー部やラグビー部みたいになればいいなと思っています。大人の部活みたいな感じです。20年ぐらい頼まれもしないのにわざわざ板を担いで雪山まで行って、お金を払ってリフトに乗って滑っている人とかいますよね。なぜそんなに寒い時に寒い所に行ってわざわざ登って降りるという労働をしているんだらうと思いますが、その人達にとってはすごく楽しいことなんです。だからプロジェクトを自分達の楽しいことにすればいいんです。お金を払ってでもやりたいことにどういうふうに変えていくのかということです。それにスキーは1人で行ってても楽しくないんです。だからスキー部のような形にしていけばいいんです。

1人でやることとスキー部との間にどんな違いがあるのか整理していくと、続く活動団体というものがどんなものかちょっとずつ見えてきます。スキー部なら自分達でキャプテンを決めます。だからまず活動団体は自分達でリーダーを決めることが大事だと思います。

そして3年か4年経ったら先輩達は卒業します。これは大事です。卒業していくというのは仕組みの中に入れておかないといけないと思います。

それから毎年4月には新入生勧誘をします。自分達のチラシを作ったりして何をしているか知らせて新入生の勧誘をします。これも活動団体だって大人の部活なんですから一緒だと思います。ずっと同じメンバーでしていたら高齢化して少なくなっていってしまいます。ある時期がきたらちゃんと自分達がどんなことをやっているのか知らせて、年に1回は部員全員で勧誘することが大事だと思います。

あとは日々の練習がなんなのかです。スキー部なら腕立て伏せや走り込みをやっているのかもしれませんが。それぞれの活動団体における日々の練習は何かということです。それは別に楽しいわけではないけれど、スキーをやるためには必要で、活動団体をするためには必要なことです。ひょっとしたらその一部は事例収集なのかもしれません。さっき言ったように皆で事例を集めてきたりすることです。それぞれの団体で日々の練習は何をやっているのか、そういうのは大事になってきます。

あとは定期的に練習試合をやっているかどうかです。例えば地域の産業文化祭に何か出店するとか、自分達の企画したイベントをやってみるとかということです。これが練習試合だと思います。

あと年に1回ぐらい全国大会に挑戦してみた方がいいです。「地域づくり大賞」とか、ちょうど来週に池袋である「アイランダー」とか、離島の人達が出てくるところに自分達も応募してみるんです。それでどのへんのレベルのことをやっているのかちゃんと自分達で

知ること、これも大事だと思います。

だから新入生勧誘をすること、日々の練習は何をするのか、練習試合はちゃんと組んでいるか、全国大会にちゃんと出ているか、そして卒業していく仕組みがちゃんと作れているかです。さらにはリーダーが部活の部費を集められているかです。活動費用を収益事業で集めてきているのか、皆の参加費みたいなもので集めてきているのか、会員の会費みたいなもので集めてきているのか、どんな方法でもいいですが、活動を持続させていくための費用を自分達で捻出できているかです。

このへんがうまく組み合わせるとまさに先ほどのスキー部、サッカー部、ラグビー部のように、適度にモチベーションを持ちながら、ちょっとずつ部員が競いながら、試合にもちゃんと出るし、今回はここまで行けたという小さな成功体験も出てきます。そういう感じで長い間プロジェクトを続けていくことができるのかなと思います。

たぶん、今日も1つのきっかけなんです。

ここでのつながりから思いもよらない活動が発生する可能性も。

僕達の仕事はそんなコミュニティを地域に生み出して去ることです。僕達がいつ去ろうと思うかということコミュニティが自走し始めた時です。今言ったような要素がコミュニティにできあがった時がコミュニティが自走し始めた時なので、いよいよ僕達の仕事は終わりです。嬉しい瞬間でもあり、寂しい瞬間でもあります。「地域にコミュニティができて自分達でちゃんと回るようになってきた、じゃあいよいよ僕達はいらなくなってきたね」ということでその地域から去ります。大体3年ぐらいでそういうコミュニティを生み出していなくなるということをしています。僕達スタジオLをやってきて8年目ですが、そのあとすぐに無くなっていったというチームはないです。彼らは自分達で楽しんでいますので、むしろ僕達が「えっ、今はそんなこともやってるの？」ということも多いです。なんとなく自走していく仕組みをそれぞれの活動団体の方々が作っていくことが必要なんじゃないかなと思います。

いずれにしろ、こういうことに興味を持って川上村の中でこれだけの人が集まって、それぞれの問題意識で、子どもの数をどうしていくのか、これから自分達の仕事をどうしていくのか、林業をどうしていくのかななどを考えながら、どうやったら活動がうまくいくのかを本気で考えている、これこそがこの村の大きな資源だと思うんです。熱意だったり、その人達の気持ちが大きな資源だと思います。

この人達がどういうふうにつながっていくのか、イベントでもプロジェクトでもいいのでつながるきっかけを作ることがいいとお話しました。とすれば、今日もたぶん1つのきっかけなんです。だからご質問された方は特にですが、何かきっかけがあって坊主にひげ面の話を聞きに行こうと思った人達がここにいるわけですから、共通点はなくはないわけ

です。県外の方と名刺交換をしていってもらってもいいですし、知り合いでも久しぶりの人には「最近何してる？」と聞いてもらったらいいと思います。ここでちょっとつながりを作って、ひょっとしたら思いもよらない活動がそこからその後のやり取りで発生する可能性もあります。終わって「はい、お疲れ様でした」と言って皆ワーツと帰っていくのではなく、近くの席の人とちょっと話をしたり名刺交換をするということをしてから帰ってもらう方がいいと思います。せっかくの機会ですので生かしてもらえないかなと思います。

僕の話はこれで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

事務局

山崎さん、どうもありがとうございました。

今日は山崎さんの講演会という名のもとに皆さんにお声をかけしましたが、お話の中に何度もあったとおり、講演会という形を通じて人がつながる仕組みというより、人がつながるきっかけをここで作れたらなということで企画をさせていただきました。

「かわかもん」の皆さんは、9月のバスツアーの企画から毎回真剣に悩んで準備を進めてきてくれました。本当にありがとうございました。ご苦労様でした。

そして今川上村の中で動き始めておられる「ちびっこ増やし隊」の皆さん、「村づくり塾」の皆さん、きっと他にももっともっとあるのかもしれませんが、そういった人たちが集まって、このいいホールも利用してつながっていったらと思います。せっかくこんなにたくさん椅子があるホールですので、ここに定期的に集まって情報交換するということをいつかできたらなと思います。今日はご来場いただきましてありがとうございました。

色々な方が来られていますのでぜひ情報交換をして帰ってください。





おわりに

上の写真は、中心に山崎さん、右端が筆者。ほか6名が今年度から川上村の住民となって活動する川上村地域おこし協力隊「かわかもん」のメンバーです。

実は、今回の事業の企画書を書いたのは今年の1月。その時には、まだメンバーとは出会っていませんでした。毎年このような講演会やシンポジウムを実施し、今回で12年目となりますが、いつも考えているのは、講師はもちろん、吉野川紀の川流域をはじめ、いろいろなつながりを持つ人、川上村の人々を巻き込んでいきたいということです。

そんな意図をもって今回も企画をスタートさせました。そして6月の1回目の講座も過ぎて、巻きこまれたのは、川上村の人々である「かわかもん」のメンバーでした。

いつも目を輝かせて真剣に取り組んでくれたことが、私には新鮮でしたが、皆には重たい仕事に思えた時もあったのではないかと思います。しかし10月の講演会の会場には「かわかもん」からのお誘いで、ずいぶん多くの地域の方々に足を運んでいただきました。「かわかもん」の普段からの地域とのつながり、信頼関係を感じました。やはりかかわる人が多いほど、広がりが多様に、おもしろくなります。

「かわかもん」だけでなく、「村づくり塾」や「ちびっこ増やし隊」のみなさんのおかげで、山崎さんから具体的な話題を引き出し、身近な内容とすることができました。

このように今回の事業にご協力、ご参加いただいた多くの方々にお礼を申し上げます。

これをきっかけに、一緒に次につなげていけることをまた考えたいと思います。

どうぞよろしく申し上げます。

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語 事務局長 尾上 忠大

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語



〒639-3553 奈良県吉野郡川上村宮の平
TEL 0746-52-0888 FAX 0746-52-0388
<http://www.genryuu.or.jp>